
異端 - 吸血鬼事件 -

彩葉 陽文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異端 - 吸血鬼事件 -

【Nコード】

N1926Y

【作者名】

彩葉 陽文

【あらすじ】

ええと、元々は友人の個人サイト『Station』にて『依夢』という名前で掲載してもらっていました。完結前に更新されなくなってしまったので、ずっと放置していました。そうしてもう、ええと、8年ですか？ 色々と複雑な気分なのですが、うん、まあ、期待せずに目を通してみて下さい。

主人公の『キヨウ』たちの仲間、5人が遭遇した、ひとつの殺人事件と、その顛末を巡るお話です。

5つのchapterと、序と終で構成されています。

どういう話かは、序にだいたい書いてあるのではないかと思います。
推理モノとしての驚きは、あまり期待しないでください。

登場人物紹介

キョウ ……主人公。語り部。
ハク ……キョウの親友。フジヤの相談役。頭が良い。
シユン ……キョウの親友。幼馴染。寡黙。
チコ ……キョウの親友。ハクが好き。笑い所がわからない。
ユウナ ……キョウの親友。純和風フランス人。
シホ ……殺された少女。チーム《銀の弾丸》の一員。
タダシ ……シホの恋人。チーム《銀の弾丸》のリーダー。
寺田里穂 ……シホの妹。
フジヤ ……ハクの旧友。《クレスト》のリーダー。
アオ ……フジヤの護衛。双子の兄。
アカ ……フジヤの護衛。双子の妹。
石本哲二 ……刑事。
宮城雪芽 ……刑事。アニメ声。
楽土の婆 ……占い師。魔女。情報遣い。
紺野さん ……魔女の弟子。

序

たとえば、大人の世界と子供の世界。
世界の二極分化。

善と悪を論ずるように、正と邪を論ずるように、神と魔を論ずる
ように、光と闇を論ずるように、ある人は——もしくはより多くの
ある人々は——大人と子供の世界を区別し、明確に、決定的に対立
する存在として論じた。

汚いものを、醜いものを、臭いものを、見たくないものを、一方
的に、片方の都合など微塵も考えず、闇に怯えるように、光から目
をそらすように。

片方が片方を絶対的に否定し合うという構図を作り出す思考は、
つまりは、理解する努力を放棄した、一種の『逃げ』なんじゃない
かと、ぼくは思ったりする。

お前の考えていることはわからない。

子供は親の言うことを聞けばいいのだ。

大人は何もわかつちやいない。

それは古い考えだ。

et cetera...

いつもどこからか、そんな声が、聞こえてくる。

それはいつも変わらない。

いつまでも変わらない。

どこまでいっても変わりはしない。

ヒトの心は、いつまでも進歩しない。

ヒトという種がアフリカのジャングルで発生して以来、約五万年。
科学技術こそ順当に進歩していったとはいえ、それはあくまでも記
録と経験の蓄積の結果に過ぎず、人間という種自体の進化を示す証
左には到底ならない。人間の脳の構造自体は、五万年の昔から何の

変化もしてない。つまり、多少は「知的」になったとはいえ、精神的にはジャングルで猿と縄張り争いをしていた時代から、そう大しては――ずばり言ってしまうと――ほぼまったく、変化していない。そして人が人である限り、これからおそらく、それほど劇的な変化は望めないだろう。

だからと言って、悲観する必要はどこにもないと思う。

科学技術はこれからもますます発展して、人類社会は進歩し続けるだろう。

進歩によってどんどん豊かになれば、弱いもの、小さいものへ目を向ける余裕も生まれるはずだ。

汚いものを、醜いものを、臭いものを、見たくないものに視線を向けることもあるだろう。

どんどん優しくなっていくだろう。

今よりも、もっと。

たぶん、きっと。

――もちろんそんなの、単なる戯言にすぎないけれども。

進歩というのは複雑化していくことだし、便利になるそれ以上の速度で複雑化は進行していて、すべての事象の細部まで行き届く目は、ますます稀少なものとなっていく。機械の支援を受けて、知覚を広げても、人間それ自体のスペックには、自ずと限界はやってくる。そして、末端の存在から、見えなくなっていく。

現実的な未来予測は、とてもではないが余裕など存在しない、ひどく硬質な寒々しい世界を描く。

けれど、だけれども、いつしか誰もが穏やかに暮らせる時代がやってくる。

それは甘い甘い練乳のような未来の情景。

硬質なる理屈の外にはみ出した、あり得ざる時代の憧憬。

そんな夢想を許容する程度にはまだ、人間という種に救いは残さ

れているはずだった。

今まで見てこなかったものに視線を向け、言葉を使い、名をつけることによって、そこに新たな認識が生まれる。

未知は既知となり、不安は安心へと転ずる。

その結果——とは必ずしも言えないかもしれないが——今世界は、大人と子供、そして幼児の世界に三分化されている（二極分化の世界よりかは安定性は高い）らしい。

幼児の時代は世界に疑問を持ち、未知は好奇心を生み、人は夢を見て、望むままに毎日を生きる。

子供の時代は世界への疑問を忘れ、未知は恐怖心を生み、人は夢を捨て、望まれるままに毎日を生きる。

大人の時代は世界への疑問を思い出し、未知は対抗心を生み、人は夢を創り、望む毎日を生きようとする。

ほら、誰だつて覚えがあるだろう？

幼児の頃は目に映る何もかもが新鮮で、親や、周りの大人たちに聞いて回ったはずだ。

「ねえねえ、これなあに？　なんていうの？」

だが、そんな無邪気な時代はすぐに終わり、すべての疑問を忘れ、大人の言葉を素直に聞き、学校と塾と習い事を繰り返すだけの、子供の時代がやってくる。それは期間にして十五年前後の、長い人生の中でも四分の一にも満たない時間ではあるけれども、体感時間ではおそらく最大の時代だ。時折大人になれず、子供のまま歳を取っていくやつもいることだし。

口の悪い友人、ハクに言わせれば、世の中の大多数の成人つてやつは、夢を見ることがもなく、疑問を持つこともない、大人になれなかった子供なんだそうだ。アダルトチルドレン。その証拠は毎日会社へ行って帰るだけの人生。そこには夢も希望もない。人生の墓場だ。

ぼくには異論がある。

会社に行つて帰るだけの人生の中で、本当に夢も疑問も忘れてい

るのか？

学校へ行き、塾へ行き、習い事へ行く人々は、本当に夢も疑問も持っていないのか？

そうは思わなかった。いや、中には、もちろん、そんなやつもいるのだろう。

けれども、人によってその理由は様々だろうが、夢や疑問を持ちながらも、会社や、学校や、塾や、習い事へ行く人々も、相当数いるのではないだろうか？

例えば護るべき者のために。例えば夢につなげる一手段として。例えばそれ自体を夢へとするため。すべての疑問を忘れず、疑問を承知したままで、あえて仮面の日々を送る人も、いるのではないだろうか？

「あははっ。キョウ。お前、ホントにお人好しだな」

なぜか笑われてしまった。

どうしてだ？

理由がさっぱりわからない。

しかしともあれ、この物語内では仮面の日々どころは、実はあまり関係のない問題だったりする。

さて、いささか唐突ながら、ここでひとつ疑問を提示してみよう。

——異端とは、何か？

異なるもの。端にあるもの。本流から外れたもの。

社会の中にいることのできないもの。

領域外に棲まうもの。

弾き出されたもの。

カテゴライズされないもの。

——特殊性の強いもの。

例えば、ぼくらの住む光花市と、その周辺を含む安芸塚と呼ばれ

る一帯は、古くから七つの特殊な家系が、支配しているのだという。

光花の深宮家。

素土の月ヶ瀬家。

大伎の橘家。

上弦の七夕津家。

塚代の杜代家。

風森の宇都羽家。

山舞の舞姫家。

七つの家は、古い伝承によるとそれぞれ異なる属性を有する土地神の末裔で、血筋はそれを示す神通を受け継いでいるらしい。

もっとも今ではその力もずいぶん小さくなって、七夕津家ではその片鱗すらも失われたというし、本来七家の盟主であるはずの深宮家の血筋は、疾うの昔に耐えて久しく、橘家や宇都羽家もすでに傍流しか残っていないという。

ともあれそれらは極まった特殊性。

特殊でありすぎた為に弾き出されながらも力を持ち、反転して中心に踊り出た、異端中の異端。

しかしそれらは、際立った例外中の例外に過ぎず、ほとんどの異端は中心に達するまでには到底進むことができずに社会の外に弾き出され、消えてしまうものだけでも――

例えば、それはぼくら。

ぼくと、ぼくの仲間たち。

際立った異端には程遠く、けれどもどこか『違う』と感じている者たち。

自覚しているしていないに関わらず、他の普通に社会生活を営んでいる子供や大人や幼児たちの『仮面』を被ることができなかった、不器用で弱い異端たち。

腐ったリングではないけれども、集団の中に異質なものが混じると排除するように働くのは、免疫機構を持ち、日々病原体ウィルスと戦い続けている生命体であるところの人間としては、ある意味本

能とも言え、仕方のないところではある。

——ように思う。

したがって、学校やら塾やら習い事やら、あるいは会社やら、いわゆる『正常な』社会から排除されてしまったぼくたちは、目的を見失い、引きこもりになったり、逆に意味もなく街へ出て行ったりする。

けれども人間、独りじゃ生きていけないもので、結果、同じように社会から弾き出された仲間たちを見つけて、つるんだりするのだ。異端同士の異端な集まり。

ぼくらは世界に疑問を抱き、しかし答えを見つけられず、未知に對して戦いを挑み、しかし手段がわからず、夢を見て、しかし対象は曖昧で、望む毎日を生きようとして、もがき続けている。

中途半端な、狭間の存在。

境界上にある、世界の隙間に隠されたもう一つの時代。

どれほど詳細に世界を観察しようとも、どこかに名前のない存在がある。

いくつもの事象を観察し、名付けて、認識を深めていこうとも、どうしても取り残されてしまう存在はいる。

どこまでも、いつまでも、いて、いなくなることはない。

細切れにされ、小さく分かれたひとつひとつを区別し、名を付けていったとしても、より小さく、どこまでも小さく、細分化の連鎖に果てはない。

いくつもの境界に名を付けていったとしても、名付けられた境界と外部の境界に、さらに名を付ける余地が生じてしまう。

ぼくらは、名付けられたばかりの子供な大人。

ぼくらの外に溢れる人も、すぐに出てくるだろう。

まあ、そんなこと、いくら境界の住人であるぼくらが語ってみたところで、当事者である以上は単なる自己陶醉以上のものにはならないのだけでも。

以上が最近のストリート情報誌なんかでよく見かける『行き場のない子供たち』の論理を、ぼくとハクなりに分析し、解釈した結果。社会的に説明される分類なんて、当事者にはほとんど関係がない。光花市の南側、港の近く——素土と呼ばれる地域に自然と集まり始めた、異端とされ社会より排除された人々。数年前に存在を確認されて以来それらは『フリーチルドレン』や『ネウチル』、『オウルド』などと呼ばれ、一月ほど前に出た『ライジン』というストリート情報誌によって『ロドレン』と名付けられ、今その名称が急速に広まりつつある——なんてことも、ぼくらには関係がない。

自分たちがどう区分されようと、区分されまいと、名付けられようと、名付けられまいと、呼ばれようと、呼ばれまいと、現実にある場所と生きていく以上はその場所と生きるしかないし、ぼくらはどこまでいってもぼくらでしかない。

自分の存在する論理を言葉として正確に捉えている者なんて、極めて皆無に近い。

例外的にハクなんかはある種、確信を持って自分を生きている風ではあるが、ぼくは実のところ、幼児と子供と大人の区分や論理にしたって、半信半疑以前の、曖昧な感想しか抱いていなかったりする。

この自分たちの存在に関する議論にしたところで、親友であるハクとの会話の一片であつたからこそ、ちよつとだけ真剣になつて考えてみただけにすぎない。

幼児と子供と大人の論理が世界の真実の一端を捉えているのか、それとも単なる思い込みの妄言に過ぎないのか、ぼくにはわからないし、関係ない。興味もない。

ロドレンと名づけられているぼくらが、本当に明確に定義される存在なのかも、よくわからない。

「けど、おれたちが一般の社会から排除された人間だつてのは、確かだよな」

ああ、その通りかも。

誰がどうだと明示するつもりはないけれども、ぼくらは確かに学校や会社に普通に行って帰るだけの、『普通』の生活は出来なくなつた。なつてしまつた。

ある者は体育系家庭に生まれた文系人間であるために、家族に馴染めず、家を出るといふ選択肢以外を持たなかつた。

ある者は伝統的に血を重んじる名家の格式に反発し、出て行つた。ある者は双子の二番目であるがゆえに『いない者』として扱われた。

ある者は他者とのコミュニケーションが体質的に取りにくく、自然と独りになつていった。

ある者は一つの目的を盲目的に追いすぎるがゆえに周囲を顧みず、戻ることが出来なくなつた。

ある者は純粹な日本人の血を引きながら日本人ではないという複雑な立場ゆえに周囲に対して自ら壁を作つた。

ある者は他人に依存することに依存するがゆえに人に見捨てられていった。

ある者は特殊な能力や才能、思想ゆえに周囲を混乱させた拳句、排除されていった。

誰が誰とは言わない。理由がこれだけに限られるとも言わない。因果関係がこの通りだとも言えない。

理由は複合的だし、原因は多角的であるべきだし、社会は紙に書かれる文章よりもつと複雑だ。単純に、簡単に、当たり前のように自らの暗部を「あなたはこうである」と言い当てられていい気分になる人はいないだろうし。

けれどももまつたのでたためではなく、ぼくが今排除したばかりの「真実の一端」つてやつを、その論理は確かに捉えているのだらうと、思い直してみたりもする。

興味がないなんて、本当は言つてはいられない、極々身近にある問題なのかも。

ぼくらの仲間がどうして成立する次第になったのか、実はあまりよく覚えていない。

ぼくらの仲間。

つまり、ぼく、ハク、チコ、ユウナ、シユンの五人。

一年くらい前から一緒にいて、遊んでいた。去年の花見の時にはすでに同じグループで活動していたような記憶もあるけれども、五月の連休は別々だったような記憶もある。どうにもはっきりしない気がついたら、いつの間にか一緒にいた——てなことをハクに言ったら、やつは延々と小一時間かけてぼくらが出会った物語を語り——もしくは、騙り始めた。

「なんだと？ キョウ。お前、忘れたのか？ おれたちの、出逢ったあの事件を。衝撃的で、感動的で、歴史的で、画期的なストーリーを？ ひどいやつだな。それでも友達か？ それでも親友か？ お前は、一生の思い出にすると誓った物語を、本当に覚えていないとでも言うのか？ そうか。ならいいさ。おれにとっては宝石のごとき輝ける思い出としても、お前にしてみれば埃にも満たない瑣末な事象にすぎなかったのだろう。お前がそれでいいというのならば、それでもいいさ。お前は友達だ。親友だ。そんなお前でも、おれは受け入れてやろう。おれたちは受け入れてみせよう。それでこそ友達だろう？ たとえそいつが人を人とも思わない非道なやつだろうとも。人の心を踏み躪ることに快楽を覚える邪悪な性質の人物であろうとも。それでも受け入れ、共にいるのが友達というやつだ。そうだろう？ だから、お前が忘れたのなら、それでいい。おれたちはお前を許すだろう。そんなお前でもおれは心を傾けてやろう。さしておれの心は広いともいえないが、少なくとも、四畳半よりは広いと自負している。お前一人くらい、入る余地はあるさ。しかし聞け。確かに忘れるという行為は人間に不可欠な能力だ。忘れるという行為自体は至極当然のものであって、お前には何の責任もない。お前には何の罪もない。だが、それでも忘れてはならないものと

いうものが、燦然と宵空に煌めく明星のような記憶が、どこかに、しかし確かに存在すると思うのだ。特に、ある種の関係性の於いて片方が大切にしている記憶ならば、なおさらだ。友達には相手の過ちを正し、互いに高め合うという側面もある。だから語ろう。お前が二度と忘れないように。思い出すように。お前の脳髓に楔をもつてして刻みつけるように、語ってやろう。これがおれたちの、出会いの物語だ」

そして静粛に、厳然とハク語り始めた。

それは語られた伝説。騙られた神話。

「紀元前五世紀の古代バビロニアの……」

「待てこらっ！」

ぼくはハクの頭を平手で叩き飛ばした。

「ん？　なんだ？」

かなり力を込めて叩いたつもりが、ハクはまったく、蚊に刺されたほども感じてないようで、平然として聞き返してきた。少し口を尖らせているのは、渾身の話を中断された不満の表れだろう。

「なんで、ぼくらの出会いを語るのに、紀元前から話さないといけないんだ！」

「そうよ、おかしいわよっ！」

ぼくが怒鳴ると、ユウナもぼくに加勢して来た。少しうれしい。

「せめて五年くらい前から話さないよっ！」

いや、ユウナ。ぼくらが出会ったのはせいぜい遡って二年前だし、もつとも、ぼくとシュンに限って言えば、幼馴染という間柄で、小さいころから互いのことを知ってはいたのだけでも。

「いや、ユウナ。五年では近すぎる」

「なぜっ！」

あくまでも平然と返してくるハクに対して、ぼくは再び怒鳴り声を張り上げる。

「ん？　まさか、キョウにユウナ。お前たちは人間の『選択』というものはその人個人の意思のみで成立しているとも言うのか？」

『私は私が存在するから存在している』などと思っているのか？」「えー？ 何言ってるの？ 私が存在しているから私が存在してるのは当たり前でしょう？」

「はんつ。ユウナ。それはひどく傲慢な考えだぞ。独善的な思考だぞ。個人は個人の意思のみで成り立ってるって？ そんなものは幻想だ。妄想だ。個性というものは人との関係性の中で成立するものであつて、決して人一人にすべての根拠が立脚しているものではない。それひとつでは、決して成立しないものだ。唯一の例外は多重人格ってやつだろうが、この場合は除外してもいいだろう。ユウナにも、キヨウにも顕現するほどの多重性は確認できないからな。精神面での根拠もそうだが、人間の物質的存在原因についてもやはり一人では到底成立しない。おれたちは両親がいて、初めて生まれる存在だし、その両親にも両親がいるだろう。そもそも人間の原因にも猿人・類人猿がいるし、それらの原因も原初哺乳動物、原初脊椎動物、それこそ原始たんぱく質まで遡れ、地球の誕生、太陽系の誕生、銀河の誕生、宇宙の誕生まで遡れる。紀元前でも話にならないくらい近すぎるな」

いや、何か、問題がひどく違うような気がしたけど。

ハクはあくまでもまじめな表情だった。

「あははあはははつ。『せきついどーぶつ』だって。さすがハクっ！」

いきなり耳に痛いほどの甲高い笑い声を張り上げて、ハクに抱きついていったのはチコ。

なぜ、そこで笑う？

どこかに笑うポイントがあつたか？

この子もよくわからない子だ。いつもこんな感じで、唐突に、よくわからない部分で笑う。そして、誰もが笑う場所で笑わない。

「というか、紀元前まで遡って、私たちの出会いをきちんと因果を踏まえて説明できると考える方が傲慢のようないきがするんだけど……」

頭痛を抑えるように、呆れたようにユウナは頭を抑えてうめき声と共に言葉をもらした。ぼくは小さく右手を上げる。

「ユウナに同感……。バビロン王朝がぼくたちの出会いにどう関わってくるのか、説明できるんなら説明してほしい」

本気で、説明できるんだろうな？

と思ったのだが、ハクはまったく動揺する様子もなく「ふむ」とうなずく。

「語ってもいいが、どんなに短縮して話しても文庫本一〇冊分を軽く超えるぞ？ いいのか？」

ああ言えばこう言う。口の減らない男だった。

「まったく……ハク、どうしてあなたはそうなの？ 頭いいのに、なんでその卓越した知能を無駄な面白くもない冗談だけに費やすの？」

「ええ？ 面白いよ？」

「どこがつ！」

「言葉の並び具合が爆笑ものじゃない？ こう、絶妙な単語の並び方なんか、爆笑物よ？」

平然と、どこか陶然とした面持ちでつぶやくチコの様子を見て、

ユウナは頭痛を抑えるように顔をしかめた。

「あーもう、この二人は——っ、キョウちゃんっ！ キョウちゃんからも何か言っちゃって！」

え？ いきなりこっちに振りますか？

困ったな。ユウナとほとんど同じ意見だけど。チコのが感覚が理解できないのは今に始まった話ではない。知り合ってからずっと、チコはこんな調子だった。よくわからないところで笑い、ハクにくっついていて。いつもの、どこかちぐはぐな、しかし穏やかな情景。

澄ました表情のハクに、満面の笑みを浮かべて抱きついていつてるチコを見ると、自然と。

「二人とも仲がいいね」

そんな言葉が浮かんできたりして。

「えへへっ」

チコは笑い、ハクはむっつりとしかめ面。ユウナも顔をしかめて「ああっ。なんか悔しいわっ。キョウちゃんっ！ 私たちもいちゃいちゃしょっ！」

ぼくに飛びついてくるのだった。

「うわっ。重っ。てか、暑っ！ ユウナ、離れろっ」

「ひ、ひどーいっ！ なんてこと言うのよ。キョウちゃん、冷たいんだから」

「冷たくて結構。ほんとに暑いからどけてくれ」

「だめよ。キョウちゃん平均体温低いんだから、暖めなくちゃ」

「ちょ、ちょ、ま、マジでやばい。ま、まてっ。服の中に手を入れんなっ！」

「あはははっ。剥いちゃえっ」

ユウナの行動は次第に危険なレベルにまでエスカレートしていった。ぼくは本能的に身の危険を感じて、本気で跳ね除けようと、腕に力を込めた。びくりともしなかった。

うあ、なんて馬鹿力な娘だ。

ぼく一人じゃどうしようもないと感じ、これまでのやり取りを部屋の隅で黙ってずっと眺めていたシュンに助けを求めることにして、悲鳴交じりの声をあげた。

「シュンっ！ 助けてっ！」

ぼくらの会話には決して加わろうとはしない、けれども常に傍にいた寡黙な少年、シュン。シュンはぼくの言葉に反応し、わずかに顔を上げて周囲の状況を分析するかのようにはし観察する。

やがて答えが出たのか、小さくうなづく。

そしてそのまま目を閉じて動かない。

何を言うでもなく何をするでもない。

ただ、傍にいる。

幼い頃からシュンはずっとそんなやつだった。

究極の放置主義者。

「シュンくんの許しも出たから、二人で愛の世界へレッツラゴーッ
！」
「やめれーっ！」

——以上。

回想終了。

その後、改めて語られたハクの話では、ぼくらはやたらと危機的状況にあって、その原因はほとんどハクがもたらしたものだのだが、成り行きで関わってしまったぼくはほとんど一人で何十人も人間と戦ったような非常にバイオレンスの吹き荒れる物語で、ぼくはなんとなく思い出してしまい、凄く憂鬱な気分になり、どうしてあまりよく覚えてないのか漠然と理解して、人間の記憶力の都合のよさに感心してしまうのだが、それはまた別の話。

それはいつかの日常。

当たり前の日々。

ぼくらは世界から取り残された異端で。

それ以上に互いが互いにとって異端であつたからこそ。

過剰に。必要に。真剣に。

仲間を、友達を、友情を、愛情を、または、恋人を、演出し合つたのだろう。

互いにどこかすべてが演技だと気付いていた。

一つになれない、冷めたつながりを感じていた。

『 $1+1=2$ 』なんて、単純な数式は当てはまらない。

一つ一つの『1』にはそれぞれ異なる個性があり、異なる存在でしかないのだと、気付いていた。

数学的な記号なんてものは、デジタルなコンピュータの世界にしか存在しないものだと思っていた。

それは一個のりんごと一個のみかんを合わせ、無理矢理？2？とするようなもの。

2にはなれない。

2という、ひとつにはなれない。

一度世界から弾き出された同士だったからこそ、より過剰に、より強固に、日常を、世界を、つながりを演出しようとしたのだ。きつと。

それがとても危ういバランスだったと、気付いて見て見ぬふりをしていた。

果ての崩壊は、すべてがあるべくように壊れた、予定調和的な崩壊劇は、本来ぼくらとは、何の関係もないはずの、ある一つの殺人事件から始まった。

それはある春の朝――

Chapter 1 朝の後／一日目 その1

目が覚めてここがどこだかわからない、なんてことは、ぼくに限って言えばよくある話で。

だから見知らぬ天井が飛び込んでこようと、腹の上に誰かの頭と腕が乗っていようと、頭が二日酔いで鈍くとも、昨晚の記憶が判然としていなくとも、特に慌てることはなかった。

体を起して周りを見る。

八畳ほどの部屋の真ん中に小さな炬燵。

ぼくは、炬燵に両足を突っ込んで眠っていたようだ。体に掛かっていた毛布がずれ落ちていく。

炬燵やそこの絨毯の上に散乱する、ビールやチューハイの空き缶。ウイスキーらしき液体の入ったコップ。パックの焼酎。ワインの瓶。チップス。チーズ。イカ。マメ。ソーセージ。溶けきった元氷であるところの水。——こんなに飲んだっけ？

室内に人は、ぼくを含めて五人。

「えっと……」

つぶやいて、ぼくはゆっくりと昨晚の記憶を思い出そうとする。記憶は濃霧に覆われたように、曖昧に霞んだままだった。思い出せない。だが、その代わりにゆっくりと思考力が戻ってくる。

入り口のドアに背中を預けて眠る黒服の巨体は、シュンだろう。ぼくの相棒。寡黙な幼馴染。シュンは起きている時でも黙ってじっと動かないので、その姿は背景に溶け込んだかのように自然だ。

向かい側で眼鏡をかけたまま仰向けに倒れ、眠っているのはハクだ。ハクの寝姿なんて、初めて見た。何か、すごく違和感がある。普段は常にどこか超然としていて、機械のような印象を抱かせるハク。無防備に寝ている姿は似合わない——けど、どこか可愛らしく感じられた。

ぼくと同じく、眠るハクを可愛らしく感じたのだろうか？ ハク

の右側に、抱きつくようにして眠っている少女がいる。うつ伏せに、よくうつ伏せで眠れる。苦しくないのだろうか？ 見た感じ、普通に息をしているようだし、起きる気配もないし、きつと平気なのだろう。誰だろう？ 斑のほとんどない、綺麗な茶髪。褐色の肌。たぶん、チコだ。ハクに好意を寄せている女の子は多いけれども、抱きつくことを許されている女性は、ぼくはチコと、あと一人しか知らない。

ユウナ。一度も脱色したことがないという、綺麗な漆黒の黒髪。白すぎる透明な肌。なぜか彼女は、ぼくと同じ炬燵の辺に腰まで入っていて、同じ毛布を頭まで被っていたりする。ハクに抱きつくチコと同じように、ぼくに抱きついて眠っている。小さな寝息。長い黒髪と、細い二つの腕が、ぼくの腹に掛かっている。

「あ……えっと？」

なぜ、こうなっているのか、状況がわからず、戸惑いの声を漏らす。

「ん……う、ん……」

ぼくが動いたためか、妙に色っぽい声を漏らし、ユウナが身動きする。

しかし、反応はそれだけで、すぐに規則的な寝息を立て始める。なぜかほっとして、胸を撫で下ろす。

なんだか、変な状況になっているぞ、と。ぼくはハクとチコに視線を向ける。

線対称。炬燵を境にして、ほとんど同じような態勢。ぼくとハク。ユウナとチコ。鏡の向こうの、光景。

いや、なんだこれは。

ハクとチコならばともかく、ぼくとユウナはそんな関係じゃない。決して、ない。ありえないと言い換えてもいい。ならばどんな関係かと問われると、友人、友達、親友、その言葉の範囲内の関係であると、断言できる、はず。ひどく焦った気分ではくは着衣を確かめて、乱れてはいるものの、昨晚のままのジーンズとシャツであるこ

とを確認して、ほっとする。ほっと、息を吐くと、何やってんだ、自分は、と、ひどくバカバカしい気分に襲われ、脱力する。

脱力して、ふと目をやった部屋の隅のミニコンポのデジタル時刻表示はAM05:48。

「うわ、早っ」

思わず漏らして、果たして昨日は何時に寝たのかと考えていると、次第に昨日の記憶が蘇ってきた。

いつものように新天地町・湾岸第三公園に集まったばかりは、満開になった桜の木の下で宴会を始めたのだった。

始まりはぼくを除いたいつものメンバー四人、ハクとシユンとユナとチコ。剣術の道場へ行つて、ぼくが少し遅れてきた時には、まだそれほど公園に人の気配はなかった。だが、次第に湾岸第三公園を拠点としている他のチームも参加してきて、どこで噂を聞いてきたのか、近所のチームも集まってきた、結果、一〇〇人近い大宴会へと発展していったのだった。

……一〇〇人は少し大げさかもしれない。酔いも手伝って、数量感覚が麻痺していたのかも。けど、少なくとも、さして大きくもない公園に、普段の十倍近くもの人数が集まって騒いでいたことは確かだった。何だって、そんなに人が集まってしまったのか、今思えば少々不自然に思える。花見とはいっても、園内に桜の木は三本しかなかったし、それも大して見応えのあるものでもなかった。少し歩けば隣町の京橋川沿いの土手に、それはそれは見事な桜並木があつて、例年通りならば皆、そこに集まって宴会をするのだ。

何とか理由らしいものを考えてみると、思い当たる節はある。ばかりのチームのメンバーは、前述の五人だが、その中でもハクは、ここら一帯、素土の町中にあるロドレンのチームからかなり頻繁に相談ごとを持ちかけられている有名人だった。普段でもハクにご機嫌伺いの挨拶に来る者が多い。年に一度の花見ともなるとなおさらで、そもそもそれが鬱陶しいという理由で、わざわざ定例の宴会からは外れて、いつもの公園でささやかに楽しんでいた、はずだった

のだ。それがどういうわけか、聞きつけてきた人が集まって、小さくもないが大きくもない公園。一気に膨れ上がった人口密度に圧されるはめになったのだった。

誰も桜なんて見ていない。見る者はいない。

滑り台をステージにして、歌ったり踊ったり、時には狭い空間でアクロバットなダンスを競い合ったりもしていて、見ていてなんだかひどく危なっかしい。飽きることだけはしないが。てんではらばらに飲んだり食べたり騒いでいる間にも、ハクに挨拶に来る人間は途切れることもなく、それがまた、大変な混乱を生んでいた。

さすがにうるさくなりすぎたことで、ぼくらは避難することにして、コンビニで酒やつまみを補充しつつ、隣町の港湾町にあるユウナのマンションに転がり込んだのだ。

「……そっか、ユウナのマンションだ」

思い出すと、ちゃんと記憶にある部屋だと気付く。

学生の身分にしては破格な2Kの部屋。八畳の和室と、八畳半相当の洋室。風呂・トイレ別。エアコン、CATV、光通信インターネット完備。オートロック。駅から歩いて五分。徒歩十分の範囲内に、コンビニ、銀行、郵便局、バス停、弁当屋、スーパーマーケット、リサイクルショップが揃っている。家賃は実際いくらなのか詳しくは知らないけれども、やはりそれなりに払ってはいらるだろう、ユウナは、実はお嬢様。それも、ただのお嬢様ではなかったりする。実はフランス人。

黒髪黒瞳、モンゴロイドの彼女は、一見したところ日本人にしか見えない。

それもそのはず。彼女の両親は共に純然たる日本人。しかし、どういった理由からかはよく知らないが、フランスに帰化していて、現在、向こうで暮らしている。当然、娘であるユウナの国籍もフランスだ。

そんなわけでユウナは、純粋な日本人の血を引きながらも制度上は完全なるフランス人で、今、留学生として日本の大学に経営学を

学びに来ている。

……わざわざ日本に来てまで経営学を学ぶくらいなら、もつと他に良い所がいくらでもあるだろう、とは思っけれども、両親にとつての故郷である日本は、やはり何かしら思い入れがあるらしい。日本へ留学することは、ユウナの幼い頃からの両親の願いだったそう。ユウナ自身はずっと向こうで育ったこともあって、日本に対しての思い入れはほとんど皆無に近かった。しかし、両親の願いを受けて、ユウナは日本の片隅、光花市の大学へやってきて、それを両親も喜んだ。その結果がこのマンションと、日本円にして月額二〇万円に近い仕送りと、自動車一台。

「うちの親の日本に対する愛情の賜物ね」

とユウナは淀みのない日本語で皮肉げに語った。

愛する日本を捨て、フランスに帰化してまで彼女の両親が何をしているのかといえば、自家用車を作っているらしい。

メーカーとか、工場で流れ作業によって作られる大量生産の車ではなくて、完全オーダーメイドで、個人向けの、世界に一つしかない車をデザイン、制作する、創造的な仕事なのだそう。何代か前の大統領の自家用車を作ったとかで、あつちではちょっとした有名な人になっているとか。よくわからない。確かにすごいことのように聞こえるが、それだけならば帰化までする必要はないように思える。だからなおのこと、表には出ない複雑な事情があるのだらうと思えた。

ユウナの乗っている軽乗用車も、両親の手による作品。確かに淡いピンクの、流線型でシンプルなデザインの自動車は洋の東西を問わず、どのメーカーのカタログでも見たことのないものだった。

「……そうだ、思い出してきた」

洋室は寝室兼勉強部屋だから、入ってはダメだといわれ、和室の炬燵にぼくとハク、ユウナとチコがそれぞれ向かい合うように座り、シユンはいつものように出入り口付近の壁に陣取って、小宴会を始めた。それぞれの学校のことやら、最近の街の情勢などを適当に話

して、ネタが尽きた頃にユウナが自室から、両親が作っている車の「見本」カタログを持ってきて、広げた。確か、その時の時計は、〇時前。オーダーメイドって言うから、どんな変な車が出てくるのかと思えば、意外とまともな形をしていたこと。ぼくとチコの感想に、ハクが「そもそも車とはー」と語り始めたり。その頃になるとさすがに皆、酔ってきて、支離滅裂になってくる。ぼくの記憶も非常に怪しい。何回かトイレに行った記憶もあるし、なぜだか行かなかったような記憶もある。どっちなんだ？ 何を飲んだのかもよく覚えていない。ビールを飲んだのは公園で、ユウナのマンションに来てからは清酒や焼酎ばかり飲んでたような気がする。ワインの空瓶があるけれども、ワインなんてあったっけ？ ああ、そうだ。途中で酒が切れて「買いに行くー」とやけに陽気にユウナが出て行って、無言でシユンが追って——たぶんワインはその時に補充されたのだろう。あれは何時のことだったか。あれ？ 二人とも、いつ帰って来たっけ？

ぼくは首をかしげて、腹の上で眠るユウナに視線を落とす。

人の気も知らずに、何が可笑しいのか、実に幸せそうに表情をにやけさせて眠っている。

「……つつたく。こっちは朝から頭痛が抜けないってのに」

ぼくがユウナ以上に飲んだということも、記憶が確かなら、ないはずである。それでもぼくが二日酔い気味に頭が痛く、ユウナが平和な表情をしているのは、ユウナの方がぼくより遥かにお酒に強いということなのだろう。

——少し、悔しかったり。

よく考えてみればユウナが買い出しに出かけた時にはすでに、ぼくの記憶は怪しかったのだ。一方でユウナはちゃんと買い出しに行つて、帰ってきている。その一件だけを見ても、ユウナのアルコールに対する耐性の高さは推し量れるというものだろう。まあ、ぼくと比較して、ということではあるけれども。

ともあれ、ユウナとシユンが出て行って、直後ぐらいにぼくの記

憶は消滅している。寝たのだろう。三人で話している間中、ずっとチコがハクにしな垂れかかっていたような記憶はかすかに残っている。その後にユウナは寝ているぼくの脇に忍び込んできて、眠ったのだろう。買出しから帰ってきて……って。

よく観察したら、中身の入っている空き缶が一つもないことに気づく。

ってことは、ユウナたちが戻ってきてからも飲んでいたののだろうか？

うわ、こいつら、一体何時に寝たんだ？

少なくとも一時より前ってことはないだろう。毛布は誰がかけてくれたのだろうか？

こんな殊勝なことをハクやチコ、ユウナがするようなこととは思えない。たぶん、シュンだ。感謝しよう。ぼくはシュンに対して、軽く頭を下げた。

シュンは小さくうなずいて、言った。

「——気にするな。いつものことだ」

めずらしい。シュンの声って久しぶりに聞いた。——って、おい。

「起きてたのかよ」

呆れて言うと、シュンはうなずいて、腕を組み直して、目を閉じた。

それだけ。

起きてるんなら、もうちょつとまともなコミュニケーション取ろうよ、とか思ったり思わなかったり、やっぱり思ったり。

もっとも、シュンは昔からこんな調子なので、今さら指摘するのも詮無きことではあるのだけれども。

しかし、この状況はどうにかしたい。胸の上のユウナを見て思う。起きたいのだが、ユウナを起してしまう恐れがあるので、あまり派手には動けない。実際、ユウナの存在を意識しすぎて、変に体に力を入れ、節々が微妙に痛くなっていることだし。

……もう一度寝ようか？

二度寝。

と、思った瞬間に、トイレに行きたくなってしまった。

やはり昨日は少し飲みすぎた。

シユンに助けを求めるように視線を向けるが、目を閉じ、顔を伏せている。起きているのか、寝ているのか判別不能。

ハクのことを「無防備が似合わない」とか、隙がないみたいに表現したけれども、本当に意味で隙がないのはシユンの方だ。

寝ているのかと思っていたら起きていて、起きているのかと思ったら寝てるも同然で、隙がありそうでない。——いや、なさそうであるのか？ とにかく、二日酔いに苦しんでいる様子はない。しかしシユンは、それほどアルコールに強い方ではないことを思い出す。超然としているように見せているのはただのポーズで、やせ我慢で目を閉じてうつむいているのは二日酔いに苦しんでいることを悟られないようにしているのかもしれない。

とにかく、シユンには頼れない。トイレに行きたい。

意識すると、喻えようもない焦燥感が込み上げてきた。

やばい。これは非常にやばい傾向だ。まさか、もらしたりはしないだろうが、一刻も早く、トイレに行かなければ。

慎重に、まずユウナの右腕をつかむ。細く、柔らかい手。そーっと、ぼくの上から降ろす。床に置かれる右腕。よし、次は左腕だ。ゆっくりと上げようとした左腕は、だが、途中で何かに引っ掛かったように動かなくなった。見てみるとユウナの右手はしっかりとぼくのシャツの裾を握り締めていた。

しまった。この事態は予測していなかった。ただ単純に、刺激を与えないようにユウナの体を、接触しているぼくの上から除けば済む問題だとばかり思っていたのだ。だが、現実はより厳しく、複雑だった。接触なんて二次元の問題じゃない。接続という、三次元の立体的な問題だ。次元の違う問題だった。ぼくは拳を作るユウナの手を半ば憎しみを込めて睨んだ。

どうする？ 指を一本一本ゆつくりとはがして行くか？ しばし

逡巡。

とりあえず、先に頭を除けることにして、ぼくは慎重に体を起していく。左手でユウナの頭を支え、出来るだけ刺激を与えないように床に下ろす。同時に自分の姿勢も変え、腰を浮かせて、両足を炬燵から抜き、毛布がずり下がるのを自然に任せる。

体から圧迫感が消えた。

思わず息を吐く。しかしまだ油断は出来ない。最大の難関が残っている。ユウナの右手はまだしっかりとシャツを握り締めている。そつと離れれば自然に解けるんじゃないかと思つて、ゆっくりと炬燵から離れていくが、シャツが伸びるだけ。どうしたらいいんだろう、まったく。

嘆息。

ぼくの思いつく限り、手段は二つ。

ユウナの指を一本一本確実に、力ずくで剥がして行くか、シャツを脱ぐかだ。

前者の力ずく的手段ならば、ユウナが目を覚ます可能性は高くなる。後者は寒いので出来ることならば遠慮したい。

春先。意識すると、冷気が急に身にしみてきた。トイレに行きたい。

しかし、力ずくはたぶん起きちゃうよなあ。宝物か何かのように異様なほどしっかりと握っちゃってるし。面倒だなあ。だったら、シャツ脱ぐしかないかあ。やだな。他に手段はないものか。ハクだつたらいくつか他に手段を思いつくのもかもしれないけれど。

炬燵の向かいに視線をやると、二種類の視線と目がぶつかった。相変わらず知的な、知的を絵に描いたような、知的な存在感を示すハクの視線。

好奇心に溢れた、楽しそうな、悪戯めいた、小悪魔的なチコの視線。

チコは寝ていたときと同じように当然とハクに抱きついている。ぼくは一瞬困って、困惑して、状況に流されるように、とりあえ

ず、朝起きて知人と出逢った時に行う常識的な言葉を、発した。

「……おはよう」

ユウナを起さないように、声を抑えて言った言葉は、自分でも思った以上にかすかなものにしかならなかった。

「んー？ 何してんの？」

だからというわけでもないだろうが、呆気からんとしたチコの声はやけに大きく響いて聞こえ、ユウナに対する多くの努力をぶち壊しにしてくれた。

「……うう……うん……」

可愛らしい声でうめき、ユウナは寝返りを打つ。ごろりと、半回転し、つられて多くのシャツも伸びる。

しかし、寝返りだけで起きる気配はなく、すぐさま安らかな寝息を立て始めた。シャツを握り込む拳も解かれる気配はない。

しばらく様子を観察し、起きないと確信してからぼくは、ほっと息を吐き、ハクとチコを睨む。

「し……」

小声で「静かにしてくれ」と言おうとすると、言葉を重ねるようにハクが、呆れたように言った。もちろん小声で。

「難儀してるな」

いや、『難儀』って、今の若い子にはそんな硬い表現通じませんよ、ハク様。

しかしまあ、ぼくらはハクの時代めいた物言いにも慣れているわけでは。

「んー？ あ、ああ、ほんと、キョウ、大変そうね、相変わらず」

ハクの言葉で状況に気付いたチコが、やや声を抑えて同情の眼差しを向けてくる。何が「相変わらず」なんだか、よく判らなかつたりするのだけれども、とりあえず声量を抑えてくれたことには感謝しとく。感謝のついでに迷惑をかけようと、握り締められたユウナの手を指して、ぼくは問い掛けた。

「これ、どうにかならないかな？」

主にハクに対しての質問。

チコは軽く首を傾げただけだったが、ハクは小さく、だがしつかりとうなずいた。

「キョウの目的がユウナの手から開放されて自由に動けるようになることだと仮定すると……そうだな、方法はたくさんあるが、とりあえず今のところは実現可能と推定される手段として四つに絞れるな。どの手段も条件は高いが……」

さすがはハクだ。ぼくは二つしか思い付かなかった。

しかも、消去法で選択したらしい。情報のカオスの中を手当たり次第に検索して、無理やりアイデアを探し出し、拾い上げるのがぼくの思考法だとしたら、カオスの中からノイズを消去していつてアイデアを自然に浮かび上がらせるのがハクの思考法だ。誰にもできる方法じゃない。ぼくの観察では、世の中の人々は圧倒的に前者の思考で生きている。ハクは特別なのだ。異端と言っても良い。異端の能力の中で、平均的他者よりも有為に働く能力の持ち主を天才と呼ぶのだろう。本人に面と向かって言うことはないが、ぼくはハクのことを天才だと思っている。羨ましくも、何ともないが、ちょっとだけ、尊敬して良いとは思っていた。

「へえ……どんな？」

促すぼくの声から、感心の感情は隠しきれていなかったように思う。かすかな響きに気付いたのか気付いていないのか、ハクは表情も変えずに淡々と語った。

「シャツを脱ぐか、指を一本一本刺激しないように剥がしていくことだな」

それこまではぼくの考えた事と同じだった。

「あとは、時間経過による自然の剥離を待つか……」

ぼくの思い付かなかった一つ。けれども、急いでトイレに行きたい為、無意識に選択外へ置いた可能性だった。——いつの間にか、トイレに行くことを忘れていた自分に気付く——が、すぐにハクの言葉が続いたために深く考えることは出来なかった。

「他には、そうだな、ユウナの腕を斬り落とすか、だな」

「なるほど、さすがはハク。その方法は思い付かなかったよ——つておいっ！」

「とんでもないことを言いやがった。」

「斬り落としてどうするのよ？」

文句が口から転がり落ちる寸前、呆れたようにチコが息を吐いた。おかげで多くの文句は行き場を無くしてしまった。胸に溜まり込む、対ハク戦文句の山。呆れられてもハクは変わらぬポーカークフェイスで、真面目に言った。

「キョウの業なら、斬り落としてまたつなげることぐらい、出来るんじゃないのか？」

——それは、ぼくが剣術を学んでいることから来る言葉なんだろうけれども。斜めに向けられたハクの視線に妙に真剣なモノを感じて。

「できねーよ。まったく、これっぽっちも、そんな達人のような、伝説のような、超人のような真似は、断じてできない」

力いっぱい、全力で否定してしまった。

第一、刀もないし。包丁で斬れってか？

「そーよ、ハク、斬り落とすのはともかく、くつつけるなんて出来るわけないじゃん」

チコもびっくりしたように言った。

「なんだ、できないのか。つまらん」

おいおい。

面白いかそうでないかで行動を決めるのか、この男は。

「……本当にできないのか？」

「できないってば。切り落とすのは、ともかくね。痛みなく気付かれないように斬り落とすことは、ひよっとすると出来るかもしれないけど、くつつけるには外科手術が必要」

それでユウナの手がシャツから離れるって保証もないし。

「まあ、冗談はいいとして」

冗談だったらしい。いや、本気で言われても困るけど。それにし
たって、笑えない。

「キヨウ、お前、どこまで出来るんだ？」

「は？ 何が？」

「剣術」

今一つ、要領を得ないハクの言葉。曖昧に対象をぼやかしている
のは、何のためにそうしているのかは不明だけれども、たぶん、わ
ざとだろうが。

「あ、あたしも聞きたかった！」

チコが手を上げる。

「キヨウちゃん、剣術やってるって言うけど、どれくらいの腕なの
？ 強いのか？ 瓦割れる？」

瓦割りは空手だ。

「藁を斬る程度だよ。それ以上はまだ、試したことがない。瓦は、
たぶん割れない」

見栄を張る理由もなく、正直に答える。師匠が吊らされた牛を斬
るところは何度か見たことはあるが、ぼくにはまだ、危険だと許さ
れていない。刀ですら今のぼくには持て余し気味だというのに、包
丁で斬り落とすなんて、考えることも出来なかった。

「なーんだ。たいしたことないのね」

一刀両断。

……いや、別にいいけどさ。どうせ。本気で剣士になろうとか、
思ってるわけじゃないし。

自慢されようと思って、剣術やってるわけじゃないし。強くなり
たいって思ってるわけじゃないし。

ちよつとした、力制御の一手段としてしか学んでないし。

どうせ暇つぶしレベルを出てないもん。

いいいじ。

「あ、いじけたいじけた」

実に楽しそうに笑われてしまった。いぢめっこだ。

「ふむ。では、ユウナの腕を斬り落とすことはできないか」
ハク。まだ言うか。

「あーよかった」

ユウナ。安堵のため息を吐く。そのキモチは判る、ような気がする。寝ている間に腕を切り落とされるなんて、「冗談じゃない」。

……って。

「……ユウナ。いつから起きてたの？」

ぼくのシャツのそでを握ったまま、少し考える仕草をしてユウナは答えた。

「んーとね『朝から頭痛も抜けてないのに』……だったかな？ その辺りから」

いつだ、それは。記憶にない。

不審げに眉間に皺を寄せるぼく表情に気付いたのだろう。ユウナは真昼の太陽を思わせる満面の笑顔で応えた。

「えっとね。シュンくんとキョウちゃんの会話の直前」

「ああ、なるほど……って、最初からじゃないかっ！」

ノリツツコミ。

声を上げて文句を言うが、ユウナは一瞬きよとした表情になり、しかしすぐに笑顔に戻る。

「えへへ。キョウちゃ〜ん」

ぎゅっと抱きついてくる。

ごまかそうと言うつもりは、きつとないのだろう。ユウナが抱き付き魔なのはいつものことだ。

ぼくの胸に顔を埋めて。勝手に抱きついておきながら、ふと、不思議そうな表情になる。

「キョウちゃんって、着やせするタイプなのね」

……失礼な。

「起きてんなら、手を放してくれない？」

「ヤだ」

「トイレに行きたいんだけど？」

「仕方ないなあ。わがままなんだから」

しぶしぶといった感じでユウナは手を離す。「ありがとう」と投げやりに答えておいて、ぼくはトイレに向かう。

向かおうとして、また障害ひとつ。ドアを背に、目を閉じているシュン。

「シュン。どいてくれない？」

訊くが、反応がない。

あれ？

変だ。おかしい。ユウナならともかく、シュンがぼくの言うことを聞かないなんてありえない。

「……シュン？」

不審に思っ、耳を顔の傍に近づける。小さな、規則的な寝息が聞こえてくる。

「……二度寝かよ」

ぼくはひどく疲れた気分になって、ため息をついてその場に座り込んだ。

こんちくしょう。

Chapter 1 朝の後／一日目 その2

それからまあ、トイレ行ったり起きたり朝食をでたらめに漁って食ったり、いろいろあつて、ユウナのマンションを出たのは八時過ぎだった。

光花市南区、南西部にある街。華沙良町から港湾町、新天地、元島町に至る一帯は、昔から素土の街と呼ばれている。

住所には載らない地名。ぼくらの暮らす街。

例えばぼくらが毎日のように集まる湾岸第三公園の住所は『光花市南区新天地四丁目2-1』といって、そのどこにも『素土』なんて文字は出てきやしない。

大昔、戦前のこと、まだこの町が光花市に併合される前までは、実際に素土町という町があつたんだそうだ。住所でも『素土町5298-3』とか言つて、馬鹿みたいな大きな数字の番地で現わされていたのだとか。

もつとも、新天地は戦後になつてから湾の埋め立てによって出来た新しい土地だし、基島町にしてもその名の通り、今は埋め立てられ地続きになつていとはいえ、元々は光花湾に浮かぶ小島だったわけで、ひっくるめて素土の街とするのは少しおかしいような気がする。大雑把というか、大らかというか。細かいことを気にしても仕方がない、ということなのだろう。

名前といえば港湾町はちよつと変なことになつていて、いかにも港がありそうな名前の町で、確かに戦前はその通り港の町だったらしいのだが、埋め立てによって内地へと追いやられ、海と接している場所などなくなつていたりする。今現在の港は、新天地にある。もつとも新天地町は、湾にあつた小島の三つか四つぐらいを飲み込んで、いまだに広がり続けていたりするので、港しかないというわけではないのだけでも。

ともあれ、素土という名前の地名は今現在この時代、存在してい

ない。

駅名とバス停にその名残りを残している他は、後は地図の上に薄いゴシックで書かれていたり、光花市を横断するバイパスのインターチェンジに残っていたり、街外れの食堂の看板に掲げられてたり、商店街の名前だったり、公園の名前だったり、図書館の名前だったり、学校の名前だったり、旅館の名前だったりするだけで、あれ？なんだ、けっこう残ってるじゃないか。

とにかくまあ。

そんな様々な地名の不思議を醸し出しながら、ぼくらの街、素土はあった。

マンションを出て向かうはいつもの新天地湾岸第三公園。さすがに昨日、放置して逃げた公園のことが気になったからだ。

新天地湾岸第三公園は住宅地の外れ、かつての島の名残、小高い丘の麓にある。こういった若者が集まる公園つてのは地域住民とのトラブルの元となるものだが、ここではぼくらのチームが作ったルールが上手く機能していて、目立ったトラブルもなく、住民たちとは比較的良好な関係を築いていた。特に何チームかの当番制になっている町内清掃の評判は良く、時折差し入れなんかも貰うほど、異例ともいえる友好な交流が続いていた。

けれども、昨日は少しまずかったと思う。

公園にまさか、あれほどの人数が集まり、お祭り騒ぎになるとは思わなかった。近所の人たちにとってはいい迷惑だったろう。もちろん、花見の事前連絡もしていなかったし。

下手な対応をすれば、これまで築き上げてきた信頼関係を一気に崩しかねなかった。

ユウナとチコは散らかしたユウナ宅の片付けに残って、ぼくは、ハクとシユンの三人で公園の様子を見に行くことにした。

ユウナのマンションは北側の港湾町にあるので、新天地町の外れの公園まではかなりの距離がある。ぼくらは春の風を涼みながらのんびりと歩いていた。

「まあ、惨状が想像ついて、なんかヤだけどね」

公園の現在の情景を、なんとなく想像してしまう。すると、ハクはしかめっ面で応じた。

「そうだな。散乱する空き缶。放置された袋類。タバコの吸殻。乱闘に使われたバットを初めとする武器類。ナイフ。棍棒。鎖。そこから吐き散らされたゲロ。使い捨てられたコンドーム。ふむ……桜の木の枝が折られてなければ恩の字だな」

「……やめろよ」

ハクの想像はリアルすぎた。

「いざとなったら、来てた連中を捕まえて掃除させればいいさ」
事も無げにハクは言う。

……まあ、そんなところだろうと、ぼくも思う。

光花市南区の華沙良町、港湾町、新天地、基島町の一帯——通称『素土の街』に住む異端の子供　ロドレン　たちは、現在クレストと言うチームの下に統合されている。ハクは《クレスト》の現リーダー・フジヤと二年前まで同じチームにいた。今もハクはフジヤとは個人的な交流があり、そのため、わずか五人のチームの一員という、現在のハクの立場からは想像もつかないほど強大な影響力を持っている。昨日の花見大会の一件はハクの力の一端でしかない。挨拶に来た連中を集めて、掃除させる程度のことならば余裕で出来るだろう。

ぼくはこっそりとハクの横顔をうかがった。

特にパツとした所のない、印象の薄い顔。どちらかと言えば整っている部類に入るだろうか？　真面目にしてればそれなりに見えるのだけれども、普段いつも本気が冗談かわからない口調と表情でいい加減な蘊蓄をかましてる姿からはとてもではないけれど、一説によると一万とも言われる素土の街中の青少年たち——ロドレンに影響力のある人間とは、とてもではないが思えない。

一年ほど前に知り合って、成り行きでずつとつるんでいるのだけれども、ぼくはいまだにハクの性格をつかめた気がしない。

ま、それはコウナだろうと、チコだろうと、幼稚園の頃からの付

き合いがあるシユンだろうと、似たようなものだけでも。

ちらりと後に視線を向ける。

並んで歩くぼくとハクの後を、三メートルほどの距離を保ってシユンがずつとついてきている。

シユンは決して喋れないわけじゃない。幼い頃はもう少しいろいろと喋っていたような記憶もあるけれども、年々口数が減っていく。今では、失語症のように、言葉が必要な時ですら、滅多に喋らない。かと思えば何の意味もないところで、唐突に喋ったりする。

話をしないから、どうしてもシユンがずつとぼくに付いてきているのか判らない。幼いころから、ぼくがどこへ行こうと、シユンは黙ってついてきた。それは、ぼくが地元を離れてここ、素土の街にやってきても、同じことだった。もうぼく自身、それに慣れてしまつて、当然のような気になっているが、客観的に考えて見るとこれは、かなり異常なことなのかもしれない。実感はないけど。四人の仲間はみんなそれぞれ複雑な性格をしているけれども、シユンが一番理解不能かもしれない。まだしも理解できるのは、チョコ入り饅頭フリークという、邪道な好みだけだ。

付き合いが一番長いけれども一番理解できていないなんて、ひどく逆説的で面白いと思ってしまった。

新天地町に入り、コンビニの角を曲がり、丘へと向かう直線道路に入る。

いきなり拡がった光景を見た瞬間、初めはまだ宴会が終わってないのかな、と思った。

たくさんの少年少女——ロドレンたちが道路に溢れていた。

「……あれ？」

疑問の聲が、自然に口をついて出た。

若い人だけじゃない。道路には、もう少し年輩の人たちもいた。とてもではないがロドレンには見えない三〇代、四〇代、五〇代——の、地域住民の皆様。見覚えのある顔もいくつかある。普通、若者と年輩の人が一緒にいる場合、何かトラブルが起きているのだと

相場が決まっている。ぼくもそう考えたのだが、若者たちも地域住民たちも一様に抑えた声でそれぞれ固まって、道路の先に視線を送っている。道路の先。ぼくらの、公園。

赤い回転灯が回っていた。

「——警察？」

つぶやき、ぼくとハクはほぼ同時に駆け出した。

すぐ跡を追ってくる、シュンの気配も感じる。

いやな予感がした。

「……乱闘でもしたか？」

思いつくのは、日常的なもの。

けれど、仮にそれで周囲の住民たちに被害が及んだのならば、ぼくらは最悪、公園を出入り禁止になる。

駆けてくるぼくらに気付いて、一人の少年が声をかけてくる。前髪に紫のメッシュを入れている童顔の少年に、ぼくは見覚えがあった。

「あつ、ハクさん！ キョウさん！」

——確か、素土の街最大のチーム《クレスト》のメンバーだ。名前は思い出せない。

「どうした？ 何があつた？」

ハクが珍しく積極的に動き、情報を求める。

「フジヤさんに知らせてきます」

といって、少年は走って人ごみの中に消えていってしまった。

「……人の話、聞かないかなあ」

ぼくはぼんやりとつぶやく。ハクは軽く肩を竦めて、少年の跡を追って、歩き始めた。

公園に近づくにつれ、人並みが二つに分かれる。

人並みが分かれて出来た道の真ん中を一人の青年が悠然と歩いてきた。背後に一八〇を越す長身の、男と女の護衛を引き連れて。護衛の男女は、双子のようにそっくりの容姿をしていた。スーツのようなストレートのパンツ、白いシャツの上にベストを着て、頭にベ

レー帽を乗っけている。違いは色だけ。男の方は青の、女の方は赤のベストとベレー帽。

顔の形すらもそっくりだった。二卵性の双子らしい。二卵性にしでは似すぎるほどに似ていたが、それは表情の醸し出す雰囲気がつくりなため、その通りに見えるだけなのかもしれない。しかし、性別が違うというのに背の高さまでが同じと言うのは、どこか逆に不自然で、不思議な感じがする。男の方が「アオ」で、女の方が「アカ」と言う。見た目そのままだ。

一方、二人を先導する青年は、それほど背は高くなかった。がっしりとした体格の持ち主だが、精々一七〇を超えた程度だろう。しかし、堂々とした歩調と全身から醸し出される存在感が青年をより巨大に見せていた。普段はどこは人懐っこい表情を浮かべていて親しみやすい感じがあるのだが、今日はその存在感を威圧的にまで高めていて、人を寄せ付けまいとしているようだった。

フジヤ。《クレスト》のリーダーで、素土のストリートの子供たち、ロドレンたちの王。異端の主。

「——ハク、キョウ」

それほど大きくはない、しかし良く通る声は、どこか深刻な響きを含んでいた。

「フジヤ。何があった？」

「殺人だ」

簡潔なハクの問いにフジヤは簡潔に応えた。

「ぼくは息を飲んだ。」

「殺人だって!？」

フジヤは頭を縦に振る。

「シホって子を知ってるか？」

「——どの『シホ』？」

「……あー、タダシのチーム……《銀の弾丸——Silver Bullet》の。あのチームの娘。タダシの女だ」

「ぼくは、思い出す。」

「……ひょつとして、シヨートの娘？」

「ああ」

知っているも何も、それは――

タツタッター♪

唐突に掻き鳴らされる軽快な音楽。

Y・M・Oのライディーン。

四〇和音の携帯の着信音。

「もしもし？」

「あ、キヨウちゃん。ちょっと買ってきて欲しいものがあるんだけど」

ユウナからだった。

「あのね、コンビニでね……夜用のゴムを買ってきてほしいの！」

「あ、あのな――」

「え？ 何に使ったって？」

「ちょっと、ユウナ」

「そ・れ・は・ね……ナ・イ・シヨ！」

「……」

「あれ？ おーい。キヨウちゃん。ノリが悪いぞー！」

「……あ、あのさ、ちょっと今、そーゆーノリじゃないんだけど」

「ん？ ほえ？ 何？ 何かあったの？」

「あのさ、シホって娘、いたでしょ？ 一昨日、ユウナとチコと、三人で遊んでた」

「シホちゃん？ 《ギンダン》の？」

ギンダン？ ああ、銀の弾丸。《Silver Bullet》か。

「シホちゃんがどうしたの？」

「えっと……あの……死んだんだって」

「へ？」

「……」

『またまたあ。笑えない冗談言っちゃって』

「いや、ホント。ぼくが確認したわけじゃないけど。冗談じゃないっぼい。警察来てるし」

『えっえっえっ！』

しばらく電話越しにバタバタとした音が聞こえてくる。

どたんがたんと、何かが倒れる音。

何をやってるんだ？

『ど、どこでっ？』

ユウナの声はさすがに動揺していた。

「公園で」

『どういうことよっ！』

「いや、ぼくも今聞いたばかりでよく……」

『今からそっち行くから待ってて！』

プチッ。ツー、ツー、ツー……

非常に慌しかった。

携帯電話を呆然と見下ろして、ぼくはフジヤたちの視線に気付いた。

「……というわけで、ユウナたちの友達らしいんで知り合いではあるんだけど……、何があったの？」

「わからん。殺されていたのは公園じゃない。丘の中だ」

「丘の中？ 何だって、そんな所に……って、決まってるか」

公園の背後には、ここ一帯が元々島だった時の名残——小高い丘になっている。

頂上付近にある岩場を除いて、全体的に木々が覆っている。一応、山道らしきものもついていて、湾岸町側に抜けるようになっていたが、見通しもあまりよくないので、ほとんど通行はない。そもそも、あまり大きな丘でもないのに、麓を回った方がかえって時間の短縮になるほどだ。明かりのない夜になると、人通りはまったくなくなる。

逆に言えば、それはこっそりと隠れるには、絶好の場所、ということだ。

祭の現場を離れて人気のない丘に登っていくのだ。やることは、だいたい想像がつく。

が、フジヤは首を左右に振った。

「それもわからん。発見者はタダシだ」

「……犯人？」

「さあな。演技には見えなかったがな」

演技……？ ああ、発見した時の、タダシの様子か。どういうことだろう？

タダシはシホの恋人だ。ぼくは、あまりよくは知らない。だが、フジヤがそういうので、その情報は確かなものなのだろう。

タダシが第一発見者で、犯人ではないとするならば、祭りの夜、恋人であるはずの二人は、別々にいた、と言うことだ。

……よくわからない。

「ふむ……」と、ハクがうなずいた。何かわかったという表情をしている。

「痴情のもつれ、ってわけじゃないのかもな」

「だろうな」

ハクもフジヤも二人だけで何かを納得しているようだった。なんだろう？ 少し考えてみようとしたけど、わかるはずもなく。

「何か知ってるの？」

訊ねた。

ハクは少し迷ったように視線を宙に彷徨わせたが、すぐに口を開いた。

「少しな。《Silver Bullet》にはしばらく前からよくない噂があつてな」

「ほー」

「それはそれはよくない噂があつたんだ」

いや、だからその噂は何？

訊こうと思っただけでも、故人の名誉ってこともあるし、ハクは
確証のない噂を無責任に垂れ流すようなやつでもないの、
訊くのはやめた。気にはなっただけでも。

Chapter 1 朝の後／一日目 その2（後書き）

……これ書いてたころは、スマホなんて影も形もなかったんですね。
え。

Chapter 1 朝の後／一日目 その3

結局ぼくらは公園へは行かず、ユウナのマンションへ戻ることにした。

今公園へ行ったところで混乱に巻き込まれるだけで、何も得るものはない、と考えてのことだった。

公園の様子は気になったが、今は人が多すぎるし、ぼくらでは何をどうした所で、どうともなりはしないだろう。その辺は警察か、それが無理ならフジヤが何とかするだろう。警察はそれが仕事だし、フジヤの《クレスト》にしてもそれは同じこと。街のロドレンたちが嵌めを外しすぎないように統制する。そのための《クレスト》だ。フジヤには詳しい情報が判り次第知らせてくれるように依頼した。

帰る途中で走ってくるユウナたちに会った。彼女たちは当然詳しい情報を知りたがり公園へ向かおうとしたが、ぼくらは何とか説得して引きずるように連れて帰って来た。

マンションの部屋に入ると、部屋の状況はぼくらが出てきた時とほとんど変わっていないように見えた。

曰く、散乱するビールの空き缶、缶チューハイ、焼酎、ワインのボトル、スナック菓子、つまみ類の空き袋。

「……お前ら、何やってたのさ？」

「んー？ 朝ごはんの食器洗ってたのよ？」

平然とチコ。

台所の方へ、視線を向ける。なるほど。本当だ。食器だけは綺麗に片付いている。しかし、それだけにしては少し時間がかかり過ぎてないか？

「乙女には秘密の時間が多いのよ」

とユウナ。

ああ、そうですか。ぼくにはよく判らない。

秘密——にしていることくらい、一つや二つ、それなりにあるけれ

ども、秘密に時間とられることなんて、今のぼくにはないし。

「しかし、改めてみると、本当によく食ったな」

嘆息するハクに引きずられるようにぼくはぼんやりと部屋を眺める。食べ物とはかく、飲んだ量はとも五人分とは思えない。いつこんなに飲んだのだろうか。昨夜に決まってる。微妙に記憶はないけども。

「——つーか、ワインなんて飲んだ記憶がないんだけど」

「ええー？ キョウちゃん覚えてないの？」

「何を？」

「昨夜、キョウちゃんがわたしに無理やりワインを飲ませて、酔っ払って動けなくなったわたしを……」

「いや、もう冗談はいいからさ」

「……ちえーっ」

全然、テンション変わってないし。ユウナは。

——人が死んだというのに。

友達が死んだというのに？

拗ねたようにふて腐れるユウナを見ると、なんだか、夢の続きのようで——夢なんて見なかったけれども——二日酔いの続きのようで。

「……なんか、実感ないね」

ぼんやりとつぶやいたチコの言葉は、たぶんその場にいるぼくらに共通した感情だった。

本当に死んだのか？

ぼくらは死体を見ていないし。ぼくらは現場を見ていないし。ただ、集まっている人と、警察のパトカーを見ただけ。

本当に死んでいたのか？

本当のパトカーだったのか？

別の理由で集まっていた可能性は？

ぼくらはフジヤの証言を聞いただけ。

フジヤたちの狂言でないと言う根拠はあるのか？

そう考えると、ぼくらを見つけるなり質問にも応えずフジヤを呼びに行ったあの少年の行動は、ひどく怪しげな、伏線のように思えてくる。

いや、そんな馬鹿な話はない。フジヤにはそんな手の込んだ悪戯を仕掛ける理由がない。

——理由がない？

なぜそんなことがわかる？

他人のことなのに。

所詮は、他人のことにすぎないのに。

行為の理由は、絶対的な理由は、その行為者以外には知りえないもののなし。

ぼくら第三者にできることはただ想像だけ。

だから。

想像してしまう。

まるで仮想現実のように曖昧な境界。

夢のように、夢であるかのように、現実の情景が像を結ばない。

「真実かどうかであるかは——」

と、ハクがテレビをつける。

NHKのニュース番組。ちょうど都合よく、地方ニュースが始まっていた。計ったような、胡散臭さを感じるタイミング。どこか見覚えのあるテレビのアナウンサーは平坦な、落ち着きを払った声でニュースを読み上げていく。それこそ、どこか異世界の、仮想現実の出来事を語るように。

『今朝未明、新天地町郊外の新天地第三公園付近の林の中で、女性の遺体が発見されました』

けど、ああ、それは間違いない。

それは確かにぼくらの公園のことで。

『遺体は付近に住む女子高生。寺田志保さん、十七歳と見られてい

て——」

確かにぼくらの知るシホのことで。

『昨夜は公園内で若者グループによる集会が開かれており——
多くの人が集まっていたましたが、誰も志保さんの殺害現場を目撃したものは——』

確かに昨夜の出来事を示したものだった。

ぼくが何を思おうと。何を考えようと。想像しようと。夢想しよう
と。

どうあがいても現実には現実でしかなく、仮想現実の入る隙間は微塵もないと、ニユースは伝えているようだった。

淡々とアナウンサーの声が流れる中、ぼくらは奇妙に沈黙し続けた。
ていた。

現実だろうと、どれほど現実であろうと、現実感がないことだけは、確かな現実で。

奇妙な不安定感。

居心地の悪さ。

「……どうして？」

沈黙に被せるように、チコが声を漏らした。

「誰がシホを殺したの？ どうしてシホは死んだの？」

ぼくは、ハクを見た。

ハクとフジヤは何かを知っていた。

ハクと目が合った。

なぜかドキリと、心臓が高鳴った。

「情報は正しく伝わらないものだ」

「……それは、何が言いたい？」

「別に……」

ハクにしては曖昧な台詞だった。さすがに少し、動揺しているのかもしれない。だとすると、動揺している自分にきつと気付いているだろう。ハクは、そういうやつだ。

「……正しい情報ほど、早く隠され、都合により改竄されていくと

いう、原理的な問題のことだ。だから、話せない」

「自分で調べろってこと？」

「いや……」

ハクは首を左右に振った。

「正しいと確信できる情報が手に入るまで、シホのことは少し待ってくれ」

それでハクが何かシホの死の理由に関して心当たりがあると、チコにもユウナにも伝わったが、彼女たちはわずかに驚いたように顔を上げただけで、特に何も言わなかった。

『——光花市役所では、恒例の——』

ニユースはもう次の話題に映っていた。

何かの行事。

誰かの笑顔。

アナウンサーの表情はどこまでも硬質で。

そこにシホの死を匂わせる気配は、どこにもなかった。

「喪服、用意しなくちゃ——」

ユウナがそっけなく、つぶやいた。

Chapter 1 朝の後／一日目 その3（後書き）

――『Chapter 2 後の死／二日目』へ続きます。

Chapter 2 後の死／三日目 その1

死ぬってどういうことだろう？

戯言のようにつぶやいて。

じゃあ、生きるってなんだよ？

虚言のように投げ返す。

死とは何か？

個人的な意味ならばともかく、絶対的な規範ともなると、生きて
いるうちには誰も追試できないように。

生きる意味もまた、生きているうちは、あまりにも普遍的過ぎる
ため、気付かないものなのかもしれない。

少なくとも、ぼくにとって、生の意味は、死の意味を考えるより
も難しい。

たぶん誰にとってもそれは同じことだと思っけれどもぼくは、そ
れを誰かに尋ね、確かめることはしなかった。

恥ずかしいから。

それ以上にきつと、個人的な意見しか返ってこないだろうと、わ
かっていたから。

シホの死から二日経ったその日の朝、ぼくは葬式に着ていくため
の喪服を探していた。なかった。

実家を出て行った時のことを思い出す。

ほとんど手ぶらで、着ている服だけで、ずいぶん前になくなった
実母の遺してくれた結構な額の入ったぼく名義の預金通帳だけを手
にして、出てきたのだ。

探すまでもなく、喪服なんてもっていないことはわかっていたこ
とだけでも。

どうしたものかと思案していると、昨夜からぼくのアパートに泊
まり込んでいたシュンが、無言でぼくの視界に立った。

高校の制服。学らん。

自分の姿を見せ付けるように立った、シュンの服装を見て、ぼくは自分がまだ、高校生だったことを思いだした。

——ああ、思い出した。

ここのアパートに住むようになってから数日後、実家から送られてきた荷物の中に、確か高校の制服が入っていた。

高校なんて、もうずいぶんと行ってない。卒業したわけじゃないけど。

はて、まだ在籍していることになっているのだろうか？

順調に行けば今年で三年生になるはずだった。

というか、もう四月だ。ちゃんと進級しているのだろうか？

微妙なところだ。出席日数はもちろん足りてないはずだけれども、ぼくの実家は、高校のある地元ではかなり強力な権力を持つ旧家だ。ったりするので、その権力をもつてして父あたりがなんとかしてしまっているのかもしれない。

ぼくとは違い、シュンは頻繁に高校へ通っているようだが、喋らないのでぼくが今、学校でどういう扱いになっているのかはわからない。

何の連絡もないし、ぼくは自分からわざわざ確認に行く気もなかった。

わからないけれども、この際どうでもいいことだった。

押入れの奥から何とか制服を探し出して、着替えている途中でインターホン。

出る前に、シュンは特に何を言うでもなく玄関に行き、ドアを開ける。

いきなりハイテンションな声が飛んできた。

「おっはよー！ キョウちゃんっ！ いっしょに行こー！」

いや、これから遠足に行くみたいには誘うなよ。

ツッコミを入れようかと思ったけど、ユウナは出てきた人物がぼくじゃなくてシュンだったことにひどく驚いたようで、玄関先で絶

句していた。

「わ、わ、わっ。どうしてシュンくんが出てくるかな？ キョウちゃん……って、キヤーツ！ キョウちゃん何してるのっ！」

部屋の中を覗き込むようにして見たユウナが、近所迷惑な悲鳴を上げる。

「な、な、なんで服着てないのっ！」

「着替え中だつてば。誤解を招く言い方をするな」

着てないといっても、当然上半身だけだ。裸じゃなくて、下着はちゃんと着けている。普通に答えたのだが、ユウナは聞いちゃいなかった。

「いやーっ。そ、そんなっ。裸なんてっ。ふ、不潔よーっ！ シュンくんと二人きりでいたい何をしてたのーっ」

「待てっ！」

「こ、こんな朝早くから。はっ、まさか泊まり？」

「いや、泊まったんだけど、それは——」

シュンはただの幼馴染で。昨夜はなんか、帰るのが面倒そうだったから——

「ええーっ！ ととととととと泊まり！ だめっ。一晩中なんてっ！ ああ、裸で。いやらしいわっ。あんっ。いやっ。そこは止めてっ。触らないでっ。あっ、あっ、あっ、せめてシャワーを浴びてからっ」

——うわっ、錯乱してやがる。

ああ、近所迷惑どころか、変な噂が立つの、確実。

アパートから追い出されたらどうする。どうしよう？

そうしたら、しばらく、ユウナのマンションに泊めてもらうかはっ。

さては、それが策？

「あんっ。そんなっ。強引なんてだめえ。もっと優しくっ。はじめてなのっ。あ、あああっんっ」

ユウナの錯乱がますますヤバイ方向に進み始めたころ。

「シユン、やって」

ぼくの合図とともにシユンは拳でユウナの頭を殴った。

ベチツと玄関に倒れたユウナを二人掛りで室内に引きずり込む。

黒い喪服。着物。

皺になったらまずいかな？　とか思ったりもしたけれども気にしないことにした。

黒髪色白のユウナには純和風の着物はよく似合っていた。いかにも、若未亡人って感じで。微妙に色っぽかったりする。

日本人じゃないくせに。

はあ、なんだかな。

ユウナと会話していると、死ぬことだか生きることだか、そんな悩みなんてすぐくちっぽけな、どうでもいいことのように思えてしまふ。

たぶん、本当にどうでもいいことなのだ。

考えても、考えなくても。

答えを得ても、答えを得なくても。

どうせ当たり前のように生きて、当たり前のように死んでいくのだ。

いつかは、きっと。

今も、きっと。

それから三十分ほどして、特に待ち合わせをした覚えもないというのにハクとチコがぼくのアパートにやってきた。

「ううう　いったい」

ユウナが頭を押さえて起き上がった。自業自得なので無視。

「はっ！　いつの間にか、ハクちゃんとチコちゃん出現っ！」

二人に気付いて声を張り上げる。

「何っ？　どうしてっ！　いつのまにっ！　さっきはいなかったのに。はっ。まさか、隠れてた？　隠れてしてたっ？　二人も泊まり？　ま、ま、まさか4P！　いやん。なんでわたしも呼んでくれな

かったのっ！」

まだ、錯乱してた。

「いや、もういいから。ユウナが倒れてる間に来たんだよ」

何でこんなにテンション高いんだこの娘は。

「およ？ そうなの？」

きょとんとした表情でユウナは首を傾げる。ぼくらは一斉にうなずいた。

「なーんだ。時間を跳躍したわけじゃなかったんだ。うっ、頭痛が痛い」

がつくりと、ユウナは頭を押さえてしゃがみ込んだ。文法がおかしい。言葉に矛盾。頭を殴られた後遺症かもしれない。

「《時間を跳躍》って。あはははっ。ユウナおかしい！」

声を上げて笑うチコ。

いや、何故そこで笑う？

チコらしくはあるけれども、相変わらず笑い所がわからない。

さらに三十分ほどして、ぼくらはようやくシホの葬式に向けて、出発した。

ぼくとシユンは学校の制服。ハクとチコは黒のスーツ。ユウナは黒の着物。

五者五様。みんな、てんでばらばらの格好でまとまりなんてありません。やしない。

なんでぼくのアパートに集まることになったかといえば解答は簡単で、シホの実家にはぼくのアパートが一番近いからだ。こんなことになるまで、ぼくはシホの家がすぐ傍にあることを知らなかった。ぼくはシホとは単純に顔見知り程度でよく知らなかった。チコとユウナが一緒にいるところは何度か見かけたことがあるけれども、どの程度の友達なのかもよく知らない。

ぼんやりとした、死んだ少女の印象を思い出す。

ショートカットのボーイッシュな格好をした活発の少女。

人見知りすることなく、初対面からテンション高く話し掛けてきた――ような記憶がある。

よく思い出せない。ユウナたちはともかく、ぼくはそれほど親しくしていたわけでもなかったし。

街角の建て看板。

白い紙に『寺田家式場』の黒い文字。

ちらほらと、黒い服の人を見かける。

シホの苗字が『寺田』ということも知らなかった。

もっともぼくは、ハクやチコやユウナの苗字すらも知らないし、ハクに至っては、本名ですらないらしい。

理由はよくわからないけれども、ぼくらの仲間の間では、苗字は決して名乗らない伝統があった。

いつからそうなのか、なぜそうなのか、誰も知らない。

しばらく前に読んだ『ライジン』というストリート情報誌によると、既存の社会的枠組みからの脱却を目指すためにまず、本来ならば一番身近であるはずの『家族』という枠組を象徴する『姓』からの脱却を図ったのだとか。

なんとなく納得してしまいそうになる一定レベルの説得力は、何か簡単に踏み込むのを躊躇わせる畏のように感じなくもない。

「……なんだか、しみりしちゃうね」

「いや、ユウナ。今さらそんなこと言ったって、なんか白々しいし」「えーっ」

一瞬でツツコミを入れてしまったけれども、他の参列者っぽい人も道すがらちらほら見かけるために、さすがにユウナも軽口で返してくることはなかった。けれども少し不満そうな表情で、口の中で何やらぶつぶつとつぶやいている。内容は聞き取れなかったが、どうせろくでもないものに決まっているので、聞こえなくて幸いだっ

た。
ハクは今朝から何か、ずっと考えている様子で、うわの空だった。チコは相変わらずそんなハクの表情をずっと眺めては、理由もな

く笑いを堪える仕草を繰り返している。この娘も相当にわからない性格をしている。

わからないと言えバのシュンだが、ぼくらの最後尾を、周囲を警戒しつついつものように無言で歩いていた。シュンはいつも変わらない。

「……シホちゃん、本当に死んじやったんだよね」

ユウナの問いに、ぼくは応えない。

たぶん、返答を期待したものじゃないだろうし、そもそもシホを詳しく知らないぼくには、応える言葉もなかった。

「死ぬって、どういうことなのかな？」

それは今朝、ぼくが考えた事。

「わからないよ」

生きていない、ということ。

「死後の世界って、あるのかな？」

「さあ……」

それは、死んでみればわかること。

死んではじめて、実感できること。

「死とは、もう変化しないということだ」

——断言は、ぼくとユウナのすぐ後。

ハクだった。

「死は完全なる静止だ」

「死後の世界なんて、存在しない、ってこと？」

「そうは言ってない。死という階段を経て、別次元の生へ移行する可能性もあると思う」

「……どういう意味？」

「たとえ死後の世界なんかが存在するとしても、それは決して現世の継続ではない、ということだ」

「……??」

ハクの言葉を、ユウナはよく理解できていないようだった。

ぼくも、わからない。チコはわかっているのかわかっていないの

か、何か楽しそうに聞いている。シュンは……まあ、いつもの通り。「つまり——」

それでも何とか理解しようと、問う。

「——生まれ変わりはありえる、ってこと？」

「ああ、確認はできないけどな。死という完全停止の階梯は、たとえどこか別の世界で生まれ変わったとしても、両世界での連続性が消失するために起きる現象ではないかと思う」

なんだかもっともらしく説明しているわりには本気で言ってるように聞こえない。

「死後も自己を保てるなんてことは、ありえないと思う」

「——それが、ハクの哲学？」

訊ねる。

「いいや、妄想だ」

「……何よ、それ」

ユウナが呆れたように息を吐いた。

「考えても答えの出ない思索はいくら詳細に論理建てようとも、所詮は妄想の域を出ないということさ」

——そうなのか？

そうなのだろうか？

世界のどこかに真実はないのだろうか？

真実と一致する解答はないのだろうか？

何だかんだ言っても、それがハクの哲学だろうし、崇拜する思考の規範なのだろう。

ハクにとってはどうか判らないけれども、ぼくにはどこか飛躍しすぎているように聞こえるし、断定的すぎるようにも聞こえる。

いや、妄想だといって、その思索に意味が存在しないと言ってるのは他ならぬハクだっけ？

当然ぼくには、全てに賛同することはできない。
できないけれど。

「変な論理」

それは感想。

「だろう？」

なぜか満足げにハクは笑んだ。

——ハクが納得していればいい問題なのだ。

きつと、誰のためにでもなく。

明確な目的もなく。

ただ自分のため。自分が納得するために世界を考察し、生と死を
考える。

自分なりの答えを見つければいいのか。

……いや、答えが見つからなくたって。

考えていられる間はそれで十分だし、考えないのならばそもそも
そこに悩みは発生しない。

ハクが何を言いたいのかわからなくても。

ぼくが何を考えたいのかわからなくても。

Chapter 2 後の死／三日目 その2

寺田家はどこか古めかしく年代を感じさせる昔ながらの民家だった。

いったい、いつ頃建てられた家だろうかと考えたのだが、新天地街は元々無人島だった一部を除き、戦後に造成された埋立地にできた町なので、この家もいくらか古く見えたとしても六〇年は経っていないはずだった。しかし六〇年といえばよく考えてみると十二分に大昔で、剥がれかかったトタン屋根や壁を見て、ぼくは何となくさもありなんと納得するのだった。さほど大きな家でもなく、あちこちに無理な増築の跡なども見られ、全体的にひどくちぐはぐで、アンバランスな不安定感が漂っていた。木造とプレハブが渾然一体となった外観は、和風とも洋風とも言い難く、それだけでどこかみすぼらしい印象を醸し出していた。

ようするに、昔から地域に根ざした普通の家。

葬儀に参列しようとする人は多く、家の入り口はひどく混雑している様子だった。ぼくらが来た通りは駅から反対方向だったので、さほど混雑はしていなかった。

「——というか、何か揉めてない？」

「ん？」

ユウナの声でぼくは黒服の人並みを観察した。

そういえば駅側の通りに人が集まって、何やら騒然としているように見える。

何をしてるんだろう？

「来ないでっ！」

奇妙な光景に額に皺を寄せていると、突然ヒステリックな年配の女性の声が響き渡った。

ざわめきともどよめきともつかない声が周囲から漂う。

一人の女性が、駅側からやってきた一団に対して激しく当たり散らしていた。

ぼくらは自然に足を止める。

「なに？」

訝しげにチコが声を漏らした。けど、応えようがないのでぼくは、

ぼくらは止めた足を再び動かし始めた。

「――待て」

「……ハク？」

いきなり止められた。二、三步進んで、振り向いた。

「おれとチコはここで待ってる。キョウたちだけで行ってこい」

「――なんでよ？」

「え？ ハクと二人つきり？」

疑問はユウナで、驚き混じりの声はチコのもの。嬉しそうなチコの声が響き、ハクの表情は少し、しかめっ面になったように感じられた。

ぼくは首を傾げて、ハクの方、じゃなくて、人ごみの方を見た。

叫んでいる女性は中年の、どこにでもいるようなおばさん。けれども、なぜか面影がぼくの記憶を刺激した。険しい表情で叫んでいる。ヒステリックに過ぎて、周りの人に抑えられているけれども。

女性をなだめているのは皆年配の、中年以上に人のように、若い者の姿はない。

若者はみな、怒鳴られている方だった。

何十人と集まっている。

みんな一応黒っぽい服を着ているものの、形式からはまったく外れた、でたらめな服装だった。

黒い上着だけ着て、下は原色の眩しい赤いシャツなんて者もいる。何人も見た顔があった。ぼくらの、シホの仲間たち。街の、少女たち。社会から外れたもの。秩序から外れたもの。アウトロー。

「お前らは、彼女の学校関係の友達ってことにして入れてもらえ。同級生、先輩ってことにすればいい」

なんでもないことのようにハクは言った。

「ああ、そっか。おばさん、私たちのせいだと、思ってるのね」

どこか感情の抜けた声をユウナがつぶやく。ぼくも気づいた。たぶん、シユンも。それを証明するかのように、叫び声が耳に届く。

「あなたたちなんか、絶対に娘に近寄らせないわっ！」

悲痛な叫び声。

女性は、たぶんシホの母親。彼女は、シホが亡くなったのは――殺されたのは、ぼくらと付き合っていたせいだと考えたのだ。きつと。

ありえる想像だと、思った。過剰反応のようにも思えるけれども、理解はできるような気がした。

ぼくら以外の人間から見れば、ぼくらのような子供たちは社会不適応者で、異端で、例外で、アウトローで、存在するだけで不安を呼び起こすものなのだ。

ぼくら自身はぼくらでいることが当たり前すぎて、理解し辛いけれども。

「あなたたちみたいなのと付き合っているから娘はっ！」

悲痛な叫びを聞いたたびにぼくは、自分が責められているようで胸が痛む。

けれども、こんなことでぼくが罪悪感を覚えるなんて間違っている。誰に誓ってもぼくはシホの死に関して何も関わりを持っていないし、可能性を突き詰めていってもぼくに知りようもない、間接的な影響だけだろう。それほど親しかったわけでもない。ぼくはシホの死に対して何の責任も持たないし、義務もない。だから、ぼくが責められるのは間違いだ。

「あなたたちみたいなのがいるから――」

けれどもその言葉は、心からの悲痛な叫びで、ぼくらを、ぼくらの存在そのものを否定するものだったから。

鋭い刃のように、確実にぼくの心を抉っていく。

「……キヨーちゃん！」

背後からいきなりユウナが抱きついてきた。

とつさに反応ができず、固まってしまう。するとユウナはあっさりとはくから離れ、前に回りこみ、いたずらっぽく笑った。

「行こっ！」

どこへ？

それは間抜けな問いだ。

決まってる。

葬式に行くのだ。

ユウナは何のダメージも受けていないようだった。ハクも平然としてるし、チコはわかつているのかいないのか、普通に笑っていた。シユンも、いつも通り何を考えているのかわからない。

シホの母親の言葉を気にしているのはぼくだけで、慰めようとしてユウナは声をかけてくれたのだろう。

「ハクとチコは？」

気を取り直して尋ねた。

「おれたちはあいつらと待ってるさ。チコがこんな髪だしな」

ぼくらは皆、普通の格好をしている。チコを除いた四人は皆黒髪黒瞳で、黙っていれば普通の人と何の変わりもない。けれども、チコは髪を脱色しているし、その事実がシホの母親や親族に対して警戒感を抱かせてしまうだろう。学校の制服を着てきたのは正解だった。制服には無条件で人のある種の色に染め上げる力がある。学校という、誰にも理解できる組織の一員であることを強烈に示すため、それだけで異質なものは見なされなくなる。外側が理解できるっただけで、中身まで理解できるものだと思い込んでしまう。

「うん、わかった。行ってくる」

ぼくとユウナとシユンは、ハクとチコと別れて寺田家へと近づいていった。

近づいていくに連れて声はよく聞こえてくる。

シホの母親と対面するように叫んでいる少年がいることに気づいた。

見覚えがある。

タダシだ。シホの恋人という、噂。

タダシはスポーツ狩りで、髪も脱色して、銀のメッシュも入れていて、耳にピアスをして、銀の鎖を首から吊り下げ、どういづつもりなのか、一応色は黒だが着ているのは皮ジャンと皮のパンツだったりして、なんていうか、典型的というか――

「うあ、最悪な格好してるわね。小母さんじゃなくてもあんなの靈前に出せないでしょ？」

こっそりとユウナが耳打ちしてきた。

本当に、無理はない。冗談じゃない。いくら死人は何も言わず感じないとは言っても、わざわざあんな服を着てくるのは喧嘩を売っていると採られても仕方がない。小母さんに対してじゃない。シホに対してだ。何か恨みでもあるのか？ ああ、あるか。そういえば、シホは浮気をするために丘に入っていた、そこで殺されたという噂があったのだ。タダシが犯人でなければ、の話だが。もちろん、ただの噂だ。真実はわからない。けれども、ユウナたちが言うにはシホは決して『一途』なタイプではなかったようだし、ならば多少は浮気の噂が出る素地はあったのだ。タダシがその噂を信じているのかどうかはわからない。噂を信じたのならばきつと恨んでいるだろう。けれども、これは恨みゆえの行為とは思えなかった。

単なる常識知らず。

そんなところだと思い、ぼくはタダシに対する興味をなくした。

声は聞こえてくるけれども、もうタダシのものなのか、その取り巻きのものなのかわからない。

「おばさん。おれらだってえ、シホの死にはあ、そりゃーイタンデルんだぜえ」

「キャハハッ。イタンデルだってえ。頭イッツ！」

「おれたちにも、ゴシヨウコウってやつ、させろよお」

……頭が痛い。

あんなのと同列に見られるのは間違ってもごめんだった。

ふと気になって、ユウナを見る。ユウナもふざけているとは思えない一団の様子を見て、さすがに顔をしかめている。

「ユウナ。日本の葬式のやり方、わかるのか？」

いくら日本人にしか見えないといっても、ユウナは正式なフランス人なのだ。思い出して聞いたのだが、どうやら失礼な質問だったらしい。

「一応、一通りの作法は両親から学んでるから大丈夫です。祖母の葬式にも出たことがあるし」

ギャグなしの簡潔な返答だったのでぼくはほっとした。きちんと時と場合をわきまえているユウナは好きだった。

騒いでいる小母さんの背後をすり抜けるように通り過ぎ、寺田家の玄関に入る。

さて、うまく芝居をできるだろうか？

少し不安を感じていたのだが、受付に座っている中年の女性は、ぼくが何かをいう前に声をかけてきた。

「あら？ 学校のお友達？」

「え？ あ、ええ」

不意打ちに一瞬うろたえかけたが、すぐに気を取り直す。

「そうです。寺田さんとは、中学の時の……」

「ああ、三國中学の？ あっ、その制服、塚代高校の？ ああ、あそこ、七家直下の学校でしょ？すごいところじゃない！へえ、志保ちゃんにあんないところに行くお友達がいたなんて、叔母ちゃん、ぜんっぜん知らなかったわあ。高校になって、あんまりしゃべらなくなったし、学校が嫌いになったんじゃないかと思って。おばちゃん、友達がちゃんとできてるのか心配で心配で。小さいころは本当にお人形さんみたいにかわいくて、本当に大人しい子で。叔母ちゃんの膝の上で絵本をよく読んでたのよ。何時間もずっとずっと。怖い話が本当に苦手でね、あの子の嫌がる反応がとても素直で、若いらしくて、おばちゃん、ついついそんなのばかり読んであげたのよ。今思えば悪かったことをしたと思うわあ。ところで、学校

のあの子の様子はとうだったのかしら？」

「え？ あ、けど、寺田さんとは卒業以後、あまり付き合いがなく
て……今回のこと、驚いています」

「……うん……そうよね。ぐすん。……志保ちゃん、まだ若いのに、
あんなことになっちゃって……」

いきなり涙ぐんだと思ったら、泣き始めてしまった。

何なんだ、この人は？

「ええーっと」

どうしようかと思案に暮れていると。

「叔母ちゃん、何やってるの！ 後ろがつかえてるのよ。早くして
っ！」

玄関に一人の少女が飛び込んできた。ぼくらより幾らか年下。十
五歳くらいに見える。中学か、高校か、どこかの学校の制服をぼく
と同じように喪服代わりに着ている。少女はぼくら三人を見て、一
瞬訝しげな表情を浮かべたが、すぐに表情を消すと、丁寧に頭を下
げてきた。

「はじめまして。シホの妹の里穂です。今日は姉のためにわざわざ
ありがとうございます」

「あ、こちらこそどうも」

「ええと、よろしく……」

ぼくとユウナは戸惑って、あいまいな返答しかできなかった。

何か言ってくるのかと思えば、里穂はあっさりとぼくらから視線
を外し、叔母に向き直って、

「じゃあ、叔母ちゃん、お願いね」

と、さっさと奥へ引っ込んでしまった。

闊達そうで、可愛い子だが、非常に慌しかった。

「……びっくりした」

ぼくの背後でユウナがつぶやく。同感だった。何か、びっくりし
続けているような奇妙な感覚が残滓となって、まだ体の中で淀んで
いるようだった。

「じゃあ、こちらに記帳、お願いね」

少女の登場で小母さんも気を取り直したのか、白い紙とペンを差し出してきた。

名前を書け、ということだろう。

一瞬、偽名を書こうかと、考えて、手が止まった。

外の廊下ではまだ何か騒いでいるようだった。

が、すぐにもうひとつ、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「――」

声は何かを言ったようだが、ぼくの耳には届かなかった。

けれども波紋が広がるように、騒いでいた少年たちは次第に声を抑えていった。

「……どうやら、王様が来たようね」

ぼくだけに聞こえるような、ユウナの耳打ちで、安堵の気持ちが高まってくる。

この街の、外れの子たちの王。

フジヤの声だ。

ハクが呼んだのかもしれない。

子供たちは去るだろう。タダシ一人が逆らっても、意味がない。逆らうことなど、できない。フジヤはこの街では絶対的な権力を持っている。ともすれば、社会的に見ての、大人の世界での素土の街の王、月ヶ瀬家をも凌ぐほどに。

ぼくの知る限り、この街でフジヤと対等の力を持つ者は、ハク一人だけだった。

けれども、ハクのはあくまでも個人的な《天才》の特殊技能で、フジヤのように一声で何百人もの人間を動かすような力はない。いや、フジヤを動かすことができるというのもハクの力なのかも。

ぼんやりとした頭でぼくは、そんなことを考えながらも、白い紙に、黒い枠の中に、名前を書いた。

杜代京

と。

Chapter 2 後の死／三日目 その3

葬式が得意なんて人は、いないと思う。

いたとしたら、それはすごく不幸な人なのだろう。

知人に死なれるということは、それは例えさほど親しくない者のでさえ、なんらかの心に染み入るものを感じるはずだ。

それは、他人の死を見ることによって、自分自身や親しくしている知人の死を連想せずにはいられないからだ。

得意なんて言える人の不幸とは、葬式に慣れてしまったという不幸以上に、そんな死の連鎖の発端にありながらも《得意》などという、のん気な感想を言えるという事実そのものが、それほどまでに磨耗しきってしまった感情が不幸なのだ。

死の痛み鈍感になってしまった不幸。

生の痛み鈍感になってしまった不幸。

自分の痛みにも。

他人の痛みにも。

……あーつまり。

痛いです。

足が。

痺れた。

……

……

……

現代人が正座するような事態なんて、日常的にそうあるわけがなく、慣れていないのも仕方がないのだ。

お坊さんの誘眠的で意味不明なお経を聞き流しながらぼくは、自分でもよく意味のわからないことを必死になって思考することを思考して、足の痺れから気を紛らわそうとしていた。

ほかにも痺れている人はいないかと、注意して気配を探ってみれ

ば、何人か足をもじもじと動かしているのが目に付いた。老人たちは皆、小揺るぎもせずにしっかりと正座していたが、中年以下の人々の中には顔をしかめたり、姿勢を崩している人を見ることができた。前列に座っている受付をしていた小母さんも、足を崩していた。その隣に座っている里穂も、しきりに足を動かしていた。

ユウナとシユンは……と見ると、二人ともまったく涼しい顔で、きちんと姿勢を正し、前を向いてお経に聞き入っている。

なんでだ？

シユンは……確か、学校で柔道をやつてるとか言つてたから、それで慣れているのかもしれない。けれども、ユウナはどうしてだ？ 慣れているのか？ なんで？ フランスに正座があるとはとても思えない。やせ我慢をしているのかと思つたが、そうはとても見えない、涼しい表情だった。

だいたい、武術ならばよく考えてみれば剣術を学んでるのだ。なのにどうして正座で足が痺れるのだらう、と考えたが、よく思い返せば剣術の修行で正座したことなど一度もなかった。

うちの師匠は礼儀にはさほど厳しくない。

弟子同士の上下関係もわりと曖昧だったりする。

どうしてだ？

柔『道』と剣『術』の違いだらうか？

道を教えるものと、術を教えるものの違いだらうか？

いや、指導者の個人的な性格によるもののような気がする。

うう、柔道と剣術の違いなんて考えてても問題は解決しない。

（共に武術という共通項はあるものの、完全に異種の存在であるからだ）

足の痺れの原因はそんなことじゃない。だいたい、柔道も剣術もやっていないユウナが平然と正座しているのだ。ぼくとユウナの違いはなんだ？ 体重か？ 体重だったら、なんかシヨツクな気がする。

たぶん、体重は体重でも重心の掛け方に違いがあるのだらう。

正座という座り方が確立された形式として世の中に存在する以上、禍なくして座ることができないとおかしい、と思う。つまり、何かしら正しい座り方というものが存在しているに違いないのだ。痺れる正座とは、いわば正常な正座ではなくて、どこかに異常があるわけだ。

シユンとユウナにはできていて、自分にはできていない。
是認に抵抗はなかった。

技術に劣ることは決して恥ではない。

シユンは訓練によって、痺れることなくして正座が可能となった。それはシユンの功績であって、ぼくの汚点ではない。

ユウナができるのは、訓練ではないのかもしれないが、何の苦勞もなく普通に正座ができるというのならそれは天性の才能であり、つまりは天才。そんなものに対抗意識を燃やすのは愚かな行為だった。

これは、自分との戦いだ。

他人との比較ではなく、自分に打ち勝ち、痺れることのない正座を達成することを目的とした戦闘だ。

ぼくは決意を深く心に刻み込んだ。

敵は自分。

勝利するにはまず、敵を知ることから始めるべきだ。

なぜぼくは、正常な正座ができない？

正座とは足をまっすぐに折り曲げて、尻を足の上に乗せる、座法だ。足の表面に、人の全体重が掛かることになる。

手はひざの上に乗せて、背筋をまっすぐに伸ばすことが、作法と言われる。

ぼくとユウナやシユンの座り方に何か違いがあるか？

足の感覚がなくなってきた。

こっそり右手を伸ばし、指先で触れてみた。

ありえないものが突如出現したような、突き抜けたくすぐったさ。あまりにもくすぐったさを極めすぎていて、声も出ない。

悶絶以外の行動を許さない、強制的な衝動を意思で強引に抑え込み、ぼくは硬直する。

悶絶衝動を抑制することに精一杯で、他の動作が何一つできなくなる。

それでも耐えられない、強烈な衝動に歯を食いしばって一心に耐える。

息すらできない。ひよつとすると、心臓まで止まってるんじゃないかとぼくは夢想した。

やがて波が引くように、すつと悶絶衝動は消えていった。足の先に生じた接触による刺激は、古傷のようにまだ残っている。

深く、周りに悟られないように呼吸を整える。

あう。

だめだ、これじゃ。

痺れるのはなぜだろう？

体重が変に乗って血管が圧迫されるからだろうか？

血管が圧迫され血液が正常に循環しないからだろうか？

問題は体重の掛け方、重心だというのはたぶん、間違いない。普通に座っているつもりでも、余計にどこか、力が入っている。力が入っているということは、不自然だ。ならば、普通に力も何もかけず、自然に座ればいいのかというと、それも何か違う気がする。

正当は何だ？　ぼくと、シュンたちとの違いは何？　いや、他人のことより自分のことだ。自分がどうやって座っているかが問題だ。ぼくは、自分では普通に座っているつもりでいる。けれども足は依然として痺れていて、解消される様子はない。けれども、普通に座っていると感じているのは、当の自分の体を通しての感覚で、客観的に見れば不自然な座り方を、正座をしているのかもしれない。ならば、自分を客観的に見ればいいのか？

どうやって？

シユンやユウナの反応なら客観的に見ることは容易だ。感情を抑えればいい。けれども自分を客観的に観察することは体の感覚が邪魔をして、できない。

ああ、ぼくが他人だったら可能なのに。

——って、わけわかんねえよ。

……くそっ、混乱している。

………

——あ、そうだ。

思いつく。

ぼくと同じように痺れている人を観察すれば何かしら原因をつかめるのではないか？

幸い、痺れている人は多い。すぐに見つかる。むしろ選択過多な感じた。

けれども、ぼくの原因と、被観察者の原因が同じとは限らない。むしろ、違う可能性の方が高いのかもしれない。けれども、可能性はゼロではなかった。

できる限り自分とよく似た年齢・体格の人を選択し、観察すべきだろう。

視線をざっとさまよわせる。すぐに見つけた。

里穂という名の、シホの妹。

ぼくは、彼女に視線を向け——

チーン

小さな鐘の音。

お坊さんの読経は終わり、続いて『ためになる話』が流れ——

あ、なんか終わったみたい。
人が次々と立ち上がる。

もう、足を崩してもいいみたいだ。
足を伸ばす。

ぐはっ。立てない。

「……キョウちゃん、痺れたの？」

「……うっっ」

情けない声を上げてしまう。痺れた足に、ユウナのことだから悪戯を仕掛けてくるかもしれない、とか思ったが、さすがに時と場所をわきまえてか、心配そうに声をかけてくるだけだった。

「あは、はははは」

もう笑うしかない。

次々と人が立ち上がって移動していく中、ぼくだけが取り残されているようだった。

——いや、もう一人。

里穂も足の痺れが取れないのか、苦悶の表情を浮かべながら固まっている。

あ、目が合った。

「あ……」

「う……」

「あなたも？」

「あは、は、ははははっ」

「あ、ははははははっ」

いや、だから笑うしかないんだってば。

里穂もぼくよりかは幾分か自然な調子で笑い、葬式場に奇妙に乾いた空気が流れる。

深い共感につながれた空間を形成するぼくと里穂の世界を壊すように、形成する流れを断ち切るように、ユウナが口をはさんできた。
「キョウちゃん、大丈夫？ 日本語しゃべれる？」

「……」

沈黙で返答。

純和風フランス人に言われたくない言葉だった。

その後の昼食会には出るわけにもいかず、ぼくらは帰ることにした。

お悔やみの言葉とか、いろいろ、恥ずかしくないだけの作法をこなして、玄関から出ようとした時、里穂に呼び止められた。

何の用だろう？ と、何も考えずに言われるまま中庭についていたら、いきなり断言される。

「ね、あなたたち、お姉ちゃんの中学の同級生って嘘でしょ？」

少し驚いた。

ぼくはすぐに表情を消し、シユンはずっと無表情だったが、ユウナはまったくポーカーフェイスができていなかったのであり意味がなかった。すばやく周囲に里穂以外の他人がいないことを確認して、それでも慎重に、尋ねてみた。

「どうしてそう思うの？」

質問を質問で返す。わりと最低だ。

「だって、お姉ちゃんに学校の友達がいるはずないもん」

——後にして思えば、それはずいぶん言葉。

「どうして？ お姉ちゃんにもあなたが知らない友達の一人や二人、いても不思議じゃないでしょ？」

「うん、最近の友達はね。でも、あたしも同じ中学だったもん」

ああ、なるほど。姉の学校生活をちゃんと見てたんだ。ならば、姉の友達にぼくたちがいないことはすぐにわかるかもしれない。

姉想いのいい子なのかもと感心したのだが——

「うちの学校から塚代行った人なんて、ここ数年一人もいないし——」

情報源はもつと即物的というか、無体温な感じのものだった。

「あー、そんな理由ですか」

「うん！」

里穂はまったく怯まない。理解しているのかいないのか。

「ほんとね、追い返された人たちの友達なんだ」

なんとなく、隠しておきたくなくなって、正直に教えた。

「ああ、やっぱり。ロドレンなんだ。ごめんね、お母さん、あんな人じゃないんだけど……」

「ううん。気持ちはわかるよ」

わからないけど、想像はできる。

「あいつらも悪いやつらじゃないんだけどね。常識の世界から弾き出されたから常識外れのことをしなくちゃいけないって思い込んでる、ちよつと頭の硬いやつらなんだ」

「うわっ、キョウちゃん、それ、すつごく酷い言い様。頭が硬いつて言うか、悪いって言うか、はつきり言ってしまうえば馬鹿なんだけど」

ユウナの茶々が入る。お前の方がひでえよ。

ていうか、ぼくらの言い様自体、なんか彼らと自分らを差別化しようとしてて、彼らより自分たちを上に見ようとしてて、傲慢な観察なのかもしれないけれども。

里穂はぼくらの言い回しに驚いたのか、大きく何度も瞬きを繰り返し、ぼくとユウナを交互に見返す。やがて小さく首をかしげると納得したのか整理かついたのか、視線はユウナで止まり、小さくうなずく。

「……ねえ、どうしてオネエサンたちだけが来たの？」

「ん？」

「えつと、だって、特別オネエサンたちがお姉ちゃんと仲良かったってわけじゃないんでしょ？」

「ええ？ そんなことないわよ？ 私たち、あなたのお姉さまとは、すつごおおく仲が良かったの。それこそベッドの中まで」

平然と澄ました表情で言いやがったのは、もちろんユウナ。

「エロネタはもういいってえの」

酷く疲れた気分のため息を漏らす。

すっかりとした理知的な子ゆえに里穂、ユウナの言葉の内容をしっかりと深読みしてしまったようだ。顔を耳まで真っ赤に染めてしまっている。かわいいそうに。

「えー？ キヨウちゃん、エロを馬鹿にしちゃいけないわ。古来より人間の進歩を支えた二大原動力は戦争とえろと言っても過言じゃないんだから」

「いや、そりゃそーかもだけどね」

だとしてもあまり前面に押し出したくはない原動力だった。

けど、改めて聞かれると、なぜわざわざ忍び込むようにしてまで葬式に潜り込んだのか、自分の行動が謎だった。ひどく当たり前の行動のような気がして、自分自身、ほとんど意識していなかった。

シホの死に関して、まったく、欠片も気にかけていないといえば、それは嘘になる。

交流は深くないとはいえ社会的には同じカテゴリーに含まれる『仲間』だし、何より彼女の死んだ場所はぼくらが拠点にしていた公園のすぐ裏の林だ。シホが死んだ理由は何もわからないけれども、そう、ひよつとしたら、あの日、大勢の人が集まっていなかったなら、起こらない事件だったかもなんて。

——気づいて愕然となる。

ひよつとすると、自分たちがシホの死のきっかけを作ってしまったのかもしれない。

あの日の宴会。

宴会自体は予定されていたものだったけれども、集まった人数は予測を遥かに超えていた。誰があれほどまで人が集まってくるなんて、想像しただろう？ 予想できただろう？ ぼくの知る、一番の天才であるハクですら、想定外の出来事だったのだ。それは、ハク自身が原因となったからということもあるだろうが、ハク以上の予測ができる人物が、この街にいるとは思えない。

あんな人の大勢集まった、すぐ側で殺人が起きるか？

ぼくはどうして、一度も疑問に思わなかったのだろう？

シホの死からすでに二日が過ぎている。

犯人の噂や、殺された状況など、ぼくは、まだ、何も聞いていない。

どうしてだろう？

ああ、そうか、ハクが何かを知っているからだ。

知っていて、話すのは少し待ってくれと言ったのだ。

ぼくは無意識に、ハクが話してくれるのを待っていたのだろうか？

そんな、感じがする。だから一緒に、無意識にシホのことまで考えないようにしていたのだ。

いや、まったく考えなかったわけじゃない。

どうして死んだのか、犯人は誰なのか、思っけてもそれ以上先へまったく思考が進んでいなかったのだ。

シホの死は、ぼくらのすぐ身近にあつて、同じ境界内の出来事で、だから、もっと考えなくてはならなかったのに。

ぼくが今ここにいるのは、そんな無意識の欲求の表れなのだろうか？

「あのー？」

遠慮がちな里穂の声でぼくは我に返った。

「ひよつとして、お姉ちゃんの事件を、調べてるの？」

「ええと……」

どう応えようと、少し迷ってしまった。無意識では調べようとしているのかもしれないが、意識的にはぼくは、何にも考えていなかったのだ。

「きみのお姉さんが亡くなった、あの公園、ぼくらの拠点だったんだ」

結局応えたのは、理由になるのかならないのかよくわからない曖昧な回答。

言葉自体は嘘じゃない。正確には殺されたのは公園じゃないけど、それはただの誤差。

だから、葬式に忍び込んだと、続けるのは果たして嘘になるだろうか？

ぼくの言葉をどう判断したのか、里穂は首を傾げ、眉間にしわを寄せる。けれども、自分なりに理由を作って納得したのだろう。す

ぐに気を取り直したかのように、別のことを言ってきた。

「……警察が来たの。お姉ちゃん、なんか危ないことに関わったかもしれないだって。やくざとか、クスリとか、売春とか……。だから、お母さん、神経質になっちゃって」

またその言葉にぼくは、少し驚く。

「——クスリですって？」

ぼく以上に、ユウナが驚き声を上げた。

「そんな？ シホは、そりゃ、処女じゃなかったけど、でも、クスリはやってなかったわよ！」

ユウナにしては珍しく、本気で怒ったように叫んだ。里穂はびつくりして、目を見開き、けれどすぐに辺りを不安そうに見回した。ユウナの声があまりにも大きくて、周りに聞こえやしないか心配になっただろう。しかし幸い中庭にはぼくたち以外誰の気配もなかった。ユウナとは言えば、自分自身の声に自分で驚いてしまったようで、口元を手で押さえると恥ずかしそうに顔を伏せた。ユウナの様子に珍しくシユンもわずかに関心を持ったようで、目を明けて凝視していた。

「ええと、そつか。だからおばさん、あんなに怒ってたんだ」

クスリや売春という噂が本当だとしたら、恋人だったタダシが関わっていないはずはないだろう。

噂が本当で、原因がそれらを巡るトラブルだとすれば、おばさんが怒るのも当然過ぎるほど当然で、むしろ犯人扱いしないだけましなのかもしれない。

「……私も、お姉ちゃんがそんなことしてたなんて、信じたくはないけど……」

「そつか……そうだよね」

なんて声を掛ければいいのか。けれど、言えることは、この里穂って子はとても聡明で、自分を抑えることのできる、強い子だという事実。

「でも、知りたい。どうして、お姉ちゃんが死んだのか、だから……」

……」

「うん、何かわかったら知らせるよ」

つい、言ってしまった。

犯人を探すだとか、原因を調査するとか、まったく意識していなかったというのに。

つい、言ってしまった。

安請け合いだろうか？

「……うん、ありがとう」

里穂は何かを堪えるように笑った。

その笑顔を見ているだけで、その笑顔のためだけでも。

この殺人の原因を調べてみようかなと、思ってしまった。

Chapter 3 死の原因／七日目 その1

とは言ったものの、ほとんど何もせずに時は過ぎ、シホの死から今日ですでに六日が経過していた。

その間、容疑者が逮捕される様子はない。街の噂でも犯人を特定できるような確固たる根拠の感じられる情報は得られなかった。

ハクから事件に関して何かを言うてくることもない。

平穏な時が流れていく中、ぼくは自分で情報を仕入れようと、行動を始めた。それでも積極的に関わろうとしたわけではなく、誰かと話をする時についてのように話題に出す、それだけだけでも。

手に入れた情報は、大きく分けて三つある。

シホの死体の状況。

シホやタダシのグループが行っていた悪い噂。

タダシの失踪。

その三つだ。

どこまで本当のことなのか疑問だけれども、話によると、シホにはほとんど外傷はなく、死体からは大量の血液が失われていて、首筋に二つの小さな穴が開いていたのだという。

そう。

首筋の、二つの穴。

吸血鬼ですか？

はじめその話を聞いた時に、ぼくは呆れてしまった。だがしかし、少し考えれば要するにそれは、吸血鬼のような得体の知れない化け物による犯行を示すのではなく、吸血鬼を模した装飾的な殺人ということなのだろう、と解釈できた。

吸血鬼犯行の噂はかなり広まっているらしく、誰に訊いても応じてきた。反応は様々で、吸血鬼の存在を肯定否定する者だけでなく、どちらもせずに噂それ自体を膨らませて楽しんでいる者もいた。よく考えればあの日、一〇〇人近い人が死体のすぐ近くにいたわけで、

発見されて警察が来るまでに、何十人も目撃者がいただろう。となると、誰かが意図的に流した誤情報、ミスリードなんかではなく、確かにシホの死体は、吸血鬼による犯行を思わせるような装飾がなされていたのだと思う。

けれども、そのインパクトが強すぎた為か、広がった情報には尾ひれがつきすぎていた。

共通するのは首筋の、吸血痕に告示した二つの穴だけで、後は血が抜いてあったとか、巨大な注射器が落ちていたとか、いや、大量の血液が流れて川になっていたとか、死体は漆黒のマントを着せられていたとか、ウェディングドレスだったとか、裸だったとか、まったくのバラバラで、情報の意味を成していなかった。

一方で流れたのはシホの所属していたタダシのグループ《Silver Bullet》の悪い噂だった。

暴力団と関係を持つていてクスリを売りさばいていたとか、少女売春組織を構成していたとか。

こっちの情報は吸血鬼の噂とは対照的に、知っている人は知っているといった、前々から囁かれていた不穏当な情報だったらしい。

ならば、シュンや《クレスト》のフジヤが知らないはずもなく、以前に言っていたフジヤとシュンの『心当たり』とはこのことだったのかと、納得した。《クレスト》は、売春はともかく、クスリについては絶対に禁止しているので、近々一騒動があるのではと予測されていた矢先の事件だったらしい。その流れで《クレスト》の一部過激メンバーが犯人なんじゃないかとの噂もあったらしいが、それはまったく根拠のない話だった。

同レベルの根拠のない話として、クスリの売買について上部組織である暴力団とのトラブルが原因ではないかとか、売春の客との間で起きたトラブルとか、そんな噂もあった。だが、あの場所には当時、一〇〇人近い人がいたのだ。不審者の目撃情報がほとんど皆無に近い以上、まったくの第三者が関わっている可能性は薄かった。容疑者を特定する情報もいくつか錯綜している様子だったが、情

報源が『友達の友達』といった日には、ほとんど考慮に値しない問題だった。

そんな時に、タダシが姿を消した。一昨日の話だ。
シホの死後、タダシの精神は明らかに安定を欠いていたという。
ちよつとしたことでもすぐに怒り、何かに怯えるように閉じこもったり、また「シホの仇を取る」とか「犯人をぶつ殺してやる」とかやたらと騒ぎまわっていたらしい。

当然のようにまた噂は流れる。

犯人を追って街を去ったのだとか、逆に犯人から逃げているのだとか。酷い噂になると、実はシホを殺したのはタダシ自身で、発覚するのを恐れて逃亡した——なんてものもあった。

どれが本当の情報なのか、まるでわからない。ぼくには、判断できない。一つ一つの情報を取れば、どれもそれなりに正しい風に装飾はされているのだけれども、すべてをつなげてみればまるで絵にならない。

絵にならないのはまだ材料が足りないのか？

たとえ絵が示されたとしても、ぼくに絵心がないから理解できないのか？

「正しい情報ほど早く隠され、改竄されていく」

ハクの言葉は正しい。

きつと、噂なんかいくら集めたところでそれらはすべて改ざんされた後のものなのだろう。

そこから改ざんされていない、素の部分だけを抜き取って組み立てる技術は、まだぼくにはない。そんな気がする。

つまりは——

「考えても無駄なことか」

敗北宣言。

アパートの自室で布団の上に寝転がって、ぐるぐるとシホ殺害事件の情報を頭の中で転がした。

早々に諦めて、起き上がる。

結局今ぼくにできることはひとつしかなかった。

ぼくより頭のいい人に聞きに行く。

つまりはハクだ。

ハクは待つてると言ったのだが、そろそろ我慢ができなくなってきた。

「いや……もうひとつ方法があるか」

情報の収集方法に、ぼくにはもうひとつ心当たりがあった。

けれども少し、いやあまり、使いたくない心当たりだった。

それを使うくらいならば、ハクに教えてくれるよう要請する方がずっと簡単で、手っ取り早かった。

噂の中には警察とは別に《クレスト》が事件を調べているとか、そんなものもあった。当然だろう。《クレスト》の活動目的の中には街の治安維持がある。ロドレンの、成立しているのかしてないのかわからない社会の中でのみ作用する、擬似警察機構のようなものだ。彼らが動くのは、ある意味当然だ。《クレスト》が本格的に動いているのならばハクも協力しているかもしれない。《クレスト》のフジヤからハクに相談を持ち込んでくることが、以前にも何回あった。さすがに警察と行動を共にしているとは思えないが、あるレベルでは警察よりもよっぽど『こつちの世界』には詳しい。警察を出し抜いて犯人を捕まえるなんてことも、ひょっとしたらできるかもしれない。

——暴力団が関わっていないければ、の話だけれども。

どこかの組が関わっていれば当然圧力がかかるだろう。フジヤはそれでも真相を明らかにすることを諦めないかもしれないが、仲間を危険な目に合わすわけにもいかず、当然活動は縮小するだろう。暴力団に見咎められない程度に。そうなると真相を明らかにするのは難しいかもしれない。

けれどもぼくは、この事件に暴力団が関わっているとは思えなかった。

暴力団がやったのなら、あんなに人の多い場所で、目立つように死体を放置するとは思えない。

痕跡をまったく残さず、きれいに消してしまっただろう。

シホは、寺田志保は行方不明者として処理されることになっただろう。そうして行方不明になった人を、ぼくは何人も知っている。

そうなっていない。

つまりこれは、暴力団の仕業ではない。

結果、フジヤたちに圧力は掛からず、捜査は続けられる。

ならば、吸血鬼の犯行だと噂される死体の状況が気になった。

吸血鬼の犯行に擬するなんて、いわゆる小説やらドラマなんかでよくある、快樂猟奇殺人ってやつなんじゃないのか？

なら、ひよっとすると、まだ事件は終わってではなくて、ひよっとしてまだ、一人目の死者に過ぎないんじゃないかって、思えてくる。ぶるりと、身震い。

ああ、早く着替えないと。

フジヤたちには早く犯人を見つけてもらいたい。

ぼくが着替えをしつつ、事件について到底愉快ではありえない想像を巡らせていると、インターフォンが鳴ると同時にドアを乱暴にノックする音。

誰だろう？ また用もないのにユウナでも来たのだろうか？ シ

ユンはノックなんかせずに、偶然ぼくがドアを開けるまで何時間もドアの前で待ち続けるタイプだし、ハクやチコの反応は常識的で、ただインターフォンを鳴らすだけでわざわざノックまではしない。

つまり、訪問者はユウナだ。どこことなく救われた気分で、ぼくは扉を開けた。

「……あれ？」

見知らぬ二人組が立っていた。何が気に入らないのか不機嫌そうなお姉さんと、何が楽しいのか幸せそうなお兄さん。二人とも年齢は二十代後半から三十代前半辺り。対称的だがどちらも異様な雰囲気をもっていた。

お姉さんの方は一八〇を越すだろう長身で、ボディビルでもして
るのかといたいほどの筋肉が腕やら足から窺えた。けれどもどう
いうわけか、体全体の雰囲気は柔らかで、実に女性らしく見えるの
だ。なぜかと考えたら服装だ。どうしてマタニティドレスなんか着
ているのだろうか？ 何かの罰ゲームか？

お兄さんの方は、比べるとずいぶんまともで、服装は紺のスーツ
だった。明らか一回り小さいサイズだったが。普通のサイズを着れ
ばさほど目立たないだろうお腹が、小さいサイズのスーツのせいで
必要以上にでつぷりと強調されていた。なんだってわざわざこんな
服を着ているのだろうか？ やはり罰ゲームなのか？ 罰ゲーム曜日
なのか？ 殺人事件より巨大な謎のような気がしてくる。何かの作
戦なのだろうか？

お兄さんが人の良さそうな笑顔で、懷に手を入れながら聞いてき
た。

「杜代くんだね？ ちょっといいかな？ 実は――」

「警察の方ですか？ 立ち話もなんなんで、どうぞ入ってください。
お茶でも入れますから」

先手を打とう、と思ったわけだったが、有効打となったようで、
お姉さんとお兄さんはとても驚いたように目を見開いた。

「いや、でも一応規則だからね」

一瞬にして立ち直り、お兄さんは笑顔のまま、懷から取り出した
警察手帳をめくって見せた。石本哲二という名前と、スポーツ狩り
の、今よりやや若く見える目の前のお兄さんの顔写真。写真の中
のお兄さんは今日の前に立っている人物とは思えないくらいほっそり
とした表情で、しかめ面をしている。

「はあ……お兄さん、写真写り悪いですね」

感想でも求められているのかと思い、言ったのだが、何か予想外
のことを言われたらしく、刑事さんは少し驚いているようだった。

コップに麦茶を入れて差し出すと、お兄さんは何の遠慮もなく手
にとって、一気に飲み干した。

ぼくは少し啞然として、けれどもすぐに気を取り直して「オカワリいますか？」と聞いてみた。

「いや、いいよ。われらが奉仕する国民に無駄遣いさせるわけにはいかないからね」

それなら最初から飲むなよ。と思ったが、石本さんの体格ならば水分は多く必要なのだろう。たぶん。

「私は県警捜査第一課の石本哲二と言う」

「ほー次男坊ですね」

「いや、四男なんだ。私が生まれる前に長男は親父と喧嘩して家を飛び出し、次男は性転換で女になって、共に勘当されたからね。いないものとして扱われたんだ。ちなみに石本家には先月、九男の一郎が生まれた」

いや、そんな愉快的な家庭事情までは聞いてないんだけど。

何かの伏線だったりしたら、やだな。

石本さんは楽しそうに語りながらどっしりとあぐらをかいて座った。ぼくも腰を下ろす。座布団なんてブルジョワなものは存在しない。やや遅れて、女性も石本さんの隣に腰を下ろした。正座。

正座したまま女性は、深々と、静々と、丁寧に頭を下げる。完璧な大和撫子風動作に、かなり意表を突かれてしまった。

動揺するばかりに止めを刺すかのように、女性は甲高いアニメ声で自己紹介した。

「同じく捜査第一課の宮城雪芽よ。よろしくね」

愕然としてしまった。

なんなんだ、この人たちは。警察ってことは間違いないと思うけども、どうしてこう、狙ったように意表を突いてくるのだろうか？先手を打って警察であることを看破してみせた仕返しだろうか？それとも天然なのか？

「ちよつと聞いてもいいかな？」

ぼくの動揺を知ってか知らずか、石本さんは話を振ってきた。

「ええ、どうぞ」

警察に尋ねられることなんて、だいたい予測はつくけど。

「昨日の晩ご飯、何食べた？」

「はあ？」

まったく予想外の質問だった。

「答えられないのかな？」

「あ、あー、ちょっとまってください」

えっと、昨日は何を食べたかな？ ああ、そうだ。ハンバーグだ。スーパーで安い肉が売っていたのだ。

「ハンバーグです。ちなみに今朝はハンバーガーを食べました」

「寺田志保さんの殺害事件を知ってるね？ あの日の夜、きみは何をしていた？」

「えーと、友達と……」

口ごもる。

「あ、未成年の飲酒は管轄外なのでとりあえず不問にするから」

「……飲んでました」

実はメンバーの中で成人してるの、ハクだけだったりして。ユウナとチコは大学生だけれども、ぼくとシユンに至っては、まだ高校生だったりする。

「友達って言うのは？」

「ハクとユウナと、チコとシユンです」

「きみたちのチームかね？ 本名は？」

「えーと、シユンは塚守俊介で……ユウナは、佐竹夕菜、だったかな？ ハクとチコについては知りません」

「なるほど、チーム名は？」

「ありません」

「めずらしいね」

「そうですか？」

喋る。

公園で宴会を始めたこと。ぼくが少し遅れてきたこと。ビールを飲んだこと。人が増えてきたこと。收拾がつかなくなってきたこと。ユ

ウナのマンションに避難することになったこと。

「そのころ、何人ぐらいがいた？」

「……一〇〇人くらい、いると思いました。数えたわけではないので正確な人数はわかりません」

「きみたちが去ったときには九十八人だったらしいね。なかなか正確だ」

——すげえ。調べてるのかよ。

「ひょっとして、全員事情聴取してるんですか？」

「だからここに来たんだよ」

「——大変っすね」

宴会が終わるころにはもつと多くなっていただろうから、その全員の事情聴取を済ませてここに来たのなら、一週間という数字は結構早い時間なのかもしれない。

「ありがとう。ところで、何か不信な人物はいなかったかい？」

「特に気づきませんでした」

「どうしてきみのアパートの方が近いのに、佐竹さん——ユウナさんのマンションまで行ったのかな？」

「ユウナのマンションの方が断然広いからです」

「それ以降、公園には戻らなかった？」

「ええ。戻ったのは、翌日の朝——八時過ぎ……いや、それはマンションを出た時刻だから、八時半ごろです」

「その間、誰か離れなかった？」

それは、決してぼくらを疑っているわけではなく、形式的なものに過ぎなかったのだろう。

「ええと、途中、ユウナとシュンが、買出しにでたような、気がします……」

「気がする？」

「ええ、眠かったもので……けど、起きた時に最初はなかったものとか、ありましたから、買出しに行ったことは確かだと思います。部屋を出て行くユウナとシュンに、覚えがあります」

どっちがどういう順番でどのように出て行ったのかは、すでに覚えていないけれども。

「それは何時ごろ？」

「よく覚えていません。十二時前ということはないと思います。帰ってきたのは気づきませんでした。朝起きたときユウナは隣で、シユンはドアに背を預けて、ちゃんと寝てました」

「なるほど。ところでシユン君はいつもあなのかね？」

ああ？

あ、そっか。

「ええ、そうです。彼はほとんど喋りません。極めて無口に近い寡黙です」

それは警察相手には許されることではないかもしれないな、と思う。シユンはいつたいどうしたんだろう。喋ったのか、喋らなかったのか。まあ、別に容疑者ってわけじゃないし。それほど喋ることを強制されることはなかっただろう、と思う。

「ふむ」

と石本さんはうなずいて、黙って座っていた宮城さんに何やら耳打ちをして、お互いうなずきあう。

「ありがとう。参考になったよ」

立ち上がる。

どうやら本当に、参考にするだけのようだ。

そうだな。一〇〇人以上も事情聴取しているのだ。どうやらぼくの容疑者としての順位はかなり低いようだった。それもそうだ。普段あの公園を拠点にしているとはいえ、宴会となるきっかけを作ったグループの一員とはいえ、実際のあの場所にいなかった事はほぼ確実だし。ああ、そういえば、シホの死んだ正確な時刻って、わかってるのだろうか？ 当然わかってるのだろう。ぼくらがない時に起きた殺人だとわかってるからこそ、ぼくに対しての事情聴取は適当なものになったのだ。

玄関まで二人を見送って、ダメ元で訊いてみた。

「あの……容疑者、特定できてるんですか？」

「ええ、だいぶ、絞れてきています」

応えたのはアニメ声の宮城さんだった。

その言葉を素直に信じるほど、ぼくは子供ではなかった。

絞れているなんて、単なる言葉遊び。

全人類七十億人から日本在住者一億三千万人に限定できても、それは絞れたと言えるのだ。

どうなのだろう？

警察は捜査をどれほど進めているのだろうか？

関わった人が多すぎる。けれど、警察はぼくの持っていない情報を持っていないはずで。

たとえば、タダシたち《Silver Bullet》が何をしていたとか。

ぼくには、何も想像がつかなかった。

「ご苦労様です……」

つぶやいて、ドアを思い切り、叩きつけるように閉めた。

Chapter 3 死の原因／七日目 その2

その日の午後、ぼくらは久しぶりに新天地第三公園に集まっていた。

事件後、なんとなく足が遠退いていたのだが、特に出入り禁止になることもなく、ぼくらは木陰のベンチとテーブルに陣取り、思い思いに事件の情報を交換していた。

「なんか、愉快的刑事さんが来てね、事件のこと、訊いてきたの」
言い出したのはチコだった。なんだか彼女の様子は非常に楽しそうだった。

「ああ、うちにも来たよ。警察も大変だな」

何をどう大変と言っているのか、ハクの言葉はよくわからなかった。天才たるゆえんか、ハクの説明はよく起から承転を飛ばして結に直接向かう。本人以外の、誰も彼の思考の経緯は読めない。困ったやつだ。

「へえ、二人のどこにも来てたんだ？ キョウちゃんとも？」

感心したようにユウナはうなずいて、ぼくを見る。

「ああ、今朝、来たよ」

ぼくらの関わりは間接的なものに過ぎないけれども、それでも聞きに来たと言うのは犯人の目星がほとんどついていないのか、根拠薄弱の容疑者が多すぎて絞れないのか。あ、どっちも同じ意味か。

誰もシユンに尋ねるような無駄な事はせずに。

「ふーん、やつぱりみんなの所にも来たんだ」

チコは断言した。

「ねね？ 変な噂流れてるよね？」

「どんな？」

「ほら、吸血鬼」

やつぱり、チコの耳にも届いていたようだった。

彼女が口々に話す噂は、ぼくが聞いた話とほとんど同じものだった。

た。

シホの死体の様子。失われた血。首筋の二つの穴。黒マント。ウエディングドレス。コウモリ。狼の遠吠え。折られた十字架。血に染まった大地。夜。満月。

「——満月？ あの日、満月だっけ？」

少し驚いたようにユウナが声を漏らした。誰もそんなこと覚えちゃいなかった。春の月は、ほとんど意識されることはない。月や空、夕焼けが意識されるのは秋だ。春は新緑、雪解け、花、風、匂い。

「それと、この前ユウナと歩いてる時、あの子、シホの妹のリホちゃんに会ったんだけど」

「へー」

「変なこと言ってたの」

なんだろう？

ぼくはチコとユウナを交互に見る。二人とも困惑した表情をしていた。困ったようにチコが説明する。

「葬式の後、出棺って、焼きに言ったらいいんだけどね、焼いている時に中から、扉を叩くような物音と、悲鳴みたいな声が聞こえたって言うの」

「はあ？ 中って——棺桶の中？」

「ううん。違う。火葬場の、死体を焼く、釜の中」

言い難そうに否定したのはユウナだった。

なんなんだ、それは？

「それは……吸血鬼の噂のバリエーションか？」

ハクがつぶやいた。驚いている。ハクも聞いたことのない話だったのだろう。

夢想する。

焼ける棺——目覚める死者——蓋を叩く——助けて、助けて——

まだ、生きてるのっ！

「なんなんだ。吸血鬼に血を吸われた死者が、蘇ったとも言いたいのか？」

まるで伝説のように。

吸血鬼に血を吸われた者は、吸血鬼として蘇る。

ばかばかしい、冗談だ。

「なぜ里穂ちゃんが、それを言う？」

呆然とぼくはつぶやいた。

里穂ちゃんはシホの妹だ。ならばそれは他の伝聞とは違い、実際に見て、聞いた話なのだろう。

「わからないな……」

困惑したようにハクはつぶやく。

「その時すでに吸血鬼の噂が広まっていたとして、それを下地して、ちよつとした物音や、生きている姉を思う幻想が、そんな錯覚を生んだのか……」

ハクの言う、それが現実的な解釈ってものだった。

死んでも蘇るって言うのなら、誰も死なんて恐れないだろう。

「ハク……、他の参列者から、何か話を聞けないのか？」

「難しいだろう。あの家の者たちは母親のお達しでおれたちを嫌ってるからな。近づくのは厳しい」

あ……そうだった。忘れていた。シホの母親の剣幕を。あれほど嫌っていたら、嫌われていたら、いくら《クレスト》といえども近づくことは難しいだろう。警察は何かをつかんでいるのかもしれないが、たぶん、こんな変な情報なんて、重要視していない、ような気がする。

「あ、そういえば、里穂ちゃんもいったよ。全然家から出してもらえないって」

ぽんつと手を叩き、チコが言った。

「へー？ どこで会ったの？」

「駅前。学校帰りみたいだった」

ふーん。なるほど。

……なんか、推理も行き詰まった感じだ。
それもそうだ。

ぼくらは警察ではないし、探偵でもないし、できることは非常に限られている。

そもそもなんで推理なんかしているのか、今ひとつ理由も目的もはつきりしないし。

ぼくらの公園の、傍らで起きた事件だからだろうか？

ひよっとすれば犯行のきっかけになったのかもしれない、宴会を始めた責任感からだろうか？

それとも、シホの妹の、里穂の願いからだろうか？

「シホたちがクスリや売春をしてたって、本当なのか？」
ハクに訊いた。

「本当らしい。藤沢組から卸されたクスリを中高生に安価に販売していたことと、その客たちを使って売春グループを組織していたという話だ」

「藤沢組……」

それほど大きくはない組織だが、素土の街はそれこそ大小様々な組織がひしめき合うようにして渾然と共存している街なので、それほど変な話ではない。藤沢組は、比較的評判のよくない組織ではあったが。

「フジヤたちが情報を得て、『指導』しよう準備を進めていたところだったらしい」

「タイミング的にはどうなんだ？　あまりにも良過ぎやしない？」

「いいや、『指導』の予定日はまだ一週間ほど先で、それほど切迫した状況ではなかったらしい。ま、フジヤが身内を庇ったんじゃないかな」

「まさか……フジヤを疑ってるのか？」

「いや、可能性の一部さ」

まるで警察か探偵のようなことを言うハク。

困った。《クレスト》が事件を解決してくれることを期待していたのだが、彼ら自身が犯人で、もしくは犯人を庇っているとしたら、意味がない。考えもしなかった可能性だった。確かに、フジヤなら

ば、あの場所にいた一〇〇人以上の青少年たち全員に口止めすることと可能かもしれない。怪しい人物がまったく現れないという不自然こそが、その状況証拠となる。

「うわ、何か、ほんとにフジヤが犯人のような気がしてきた」

「まあ、それはないと思うがな。さすがに。もしくは、フジヤの知らないところで起きた身内の犯行かもしれない。しかし、それはそれでフジヤの支配力の衰退を示す事例となり、面白くはないな」

ハクがそういうのなら、そうなのだろう。

フジヤはハクの友達だ。

それを疑う行為は、道徳的に間違っている。

「それにフジヤたちには、吸血鬼の犯行に偽装する理由はない。フジヤの仲間に吸血鬼がいれば、別だが」

それはまた、「冗談のような話」。

吸血鬼なんて、それを口に出すだけで胡散臭くなる。

吸血鬼。吸血する鬼。ヴァンパイア。ドラキュラ。カーミラ。レストアト。ブラム・ストーカー。ヴラド・ツェペシュ。エリザベート・バートリ伯爵夫人。

御伽噺の世界。

幻想の世界。

トランシルバニアの霧と森の中の幻だ。

そんなもの、現実にいると考える方が間違っている。

——本当に？

本当に、いないと断言できる？

伝承とか、幻想とか、それに極めて酷似した歴史なら、この素土の街、そして光花市を含めた七つの家が支配するこの地域一帯にも多く残っている。ぼくはその事実をよく知ってるはずじゃないか？ 他ならぬ、かつてこの地域を支配した七家のひとつ、杜代家の末裔なのだから。

かつて自らが異端であることを極めて、極めた末に反転して、完全なる正統に踊り出てこの地を支配した、特殊中の特殊。異端の中

の異端。

異端の王家。

七家。

光花の深宮家。

素土の月ヶ瀬家。

大伎の橘家。

上弦の七夕津家。

塚代の杜代家。

風森の宇都羽家。

山舞の舞姫家。

くらくると、眩暈がする。

そんなものが存在する以上、吸血鬼なんてものはそれほど特殊な異端ではない。

異端中の異端というものは、社会から完全に弾き出されているがゆえに——もしくは、社会の中心にあるために、表には、円心以外には、決して現れないものなのだから。

これほどまでに誰もが知っている異端は、ぼくら、異端の子供たち——ロドレンと同じ、非常にありふれた、それほどでもない、レベルの低い異端なのではないか？

「そもそも、吸血鬼^{ゝゝ}って、何だ？」

一瞬、部屋が静まり返る。

発言者に視線が集まる。

「……シュンくん？」

ユウナは目を丸くしていた。

「うわっ、驚いた。何日ぶりのセリフ？」

チコは声を上げて立ち上がり、シュンに尋ねるが、もう彼は、口を開く様子を見せることなく、黙って穏やかに微笑んだ。

「——吸血鬼が、何かだって？」

ぼくは、シュンの疑問を、反芻する。

「吸血鬼って、吸血鬼じゃないの？」

「あははははつ。それじゃ、わかんないよ、ユウナあ」

チコは腹を抱えて笑い出した。とても楽しそうだ。いや、皮肉じやなくって。

「吸血鬼——ね。何だろう？」

改めて問われてみると、吸血鬼が正確にどんな存在なのかなんて、ぼくはまったく知らなかった。

「んー改めて言われてみると——血を吸う、鬼、とか？」

ぼんやりとユウナも応える。

鬼と言われても、日本で言われるような、角の生えた赤鬼青鬼ではなくて。

「黒いマントで深夜、空を飛ぶ——コウモリに化けるんだっけ？」

チコも加わってきた。

青白い肌に、真つ赤な唇からはみ出る牙。

「狼にも化けるって、聞いたことがある」

「何にでも化けるのか？」

「さあ……？ 霧にも化けるんじゃないかな？ あとは——」

「トランシルバニア出身？」

「ヴラドなんちゃらって、貴族がモデルだっけ？ 串刺し公」

「心臓に杭を打ち込んだら死ぬんだっけ？」

「吸血鬼じゃなくても死ぬだろ」

「……ごもつとも」

「そもそも、なんで血を吸うんだろう？ 美味しいのかな？」

「体液交換することにより、吸血鬼を感染させられるらしい」

「病気か？」

「いやん。体液交換なんて……」

「せ、性病か？」

「おいおい」

「けど、日の光に弱いとかってのはなんか、病気っぽい感じね。あとは、十字架に弱いとか」

「十字架に弱いのは、キリスト教の権威を高めるためだけに宣伝さ

れた流言って聞いたよ？ 最近の研究ってやつ？」

「なんだそれは。あとは、水を渡れないんじゃないかなかったわけ？」

「そうなの？ なら、どうやって日本に来たのよ？」

「和製吸血鬼なんてのもなかった？ 神魔とか」

「それはマンガの話だ」

「時を止めちゃうとか？ 『ザ・ワールド』って感じで」

「第三部だっけ？」

「婦警が様々な経験を経て立派な吸血鬼になっていくという成長物語？」

「なんか、全然違うマンガに聞こえるんですが？」

「未来の国から眼鏡の苛められっ子の所にやってきた……」

「それは『ドラ』違いだ」

「吸血鬼にちがいない」

「古っ、てか、めちゃくちゃマイナー。なんで、ユウナが知ってるの？」

「CRS所属？ ウエディングドレス着たりする？」

「あ、懐かしい。好きだったな、あの小説」

「インタビュー受けるんだっけ？」

「ハリウッド？」

「十七分割されたり？」

「えろ同人ゲーまで行くか？」

ぼくとユウナとチコの会話が激しく脱線しかかった時、ぼくらは申し合わせたように、視線をハクに向けた。

ハクは困ったような表情をしていたが、皆の期待の視線を受けて、ゆっくりと話し始めた。

「現代の吸血鬼のイメージが定着したのは、およそ百年程前のブラム・ストーカーの小説『ドラキュラ』からだ。ロンドンの霧。夜。吸血される処女。血液交換による吸血鬼の感染。棺桶。十字架。ヴァンパイアハンター・ヘルシング。太陽の光。水を渡れない。現在世間を席巻している吸血鬼の原型は、すべてこの『ドラキュラ』か

ら来ていると言ってもいい」

「創作に過ぎない？」

ぼくは尋ねる。

「そうじゃない。『ドラキュラ』によって定型が作られるまでは、吸血鬼のイメージはまったく違った、今よりも多様なものだった、ということだ。必ずしも吸血鬼は、ドラキュラではない。彼らの故郷はトランシルバニアとは限らない。東南アジアにも、日本にも、世界各地に吸血鬼の伝承は残っている。それらは今のおれたちがイメージする吸血鬼とは、驚くほど異なる存在だ」

「そうなの？」

それは、何を意味するのかと、考える。

本物の吸血鬼は、ぼくがイメージしているものとはまったく違うものと言ったことか？

知られている吸血鬼とは、現実のものとは違うと言ったことか？

ならば、吸血鬼は、その本当の姿を隠すことに成功している、異端。

ぼくが思っているよりも、ずっと高度な異端なんじゃないのか？

「にもかかわらず、今回の事件では、まさしく『ドラキュラ』のイメージ通りの装飾が行われた」

「ふむ、それは？」

それは？

本来的には無数の『吸血鬼』の一つに過ぎない『ドラキュラ』の装飾が行われたということは？

「確率的、感覚的に考えて、本物の吸血鬼の仕業とは考えにくい、ということだ」

「……………おい」

なあんだ、と息を吐く。

何を当たり前のことを。

誰も本気で吸血鬼がいるなんて、考えてはいない。たぶん。現実にいるとしても、精々が比喻程度だろう。

曰く、吸血鬼みたいなやつだな。
うわ、怖あ。

曰く、ちいすうたるか？
いや、それちよつと違うない？

「ま、『ドラキュラ』のイメージと一致する吸血鬼が存在しない証拠も、どこにもないんだけどな」

「――また、無茶を」

存在しない証明が簡単にできるなら、フェルマーの定理はもっと早くに解けたはずだ。

「無茶かどうかはわからないさ」

「どうして？ 現実に吸血鬼がいる証拠は誰も見つけてないのに？」
平然と言い返すハクに、ユウナが疑問を投げかけた。

存在しない証拠もなければ、もちろん存在する証拠もない。それらは同列に並べられる問題なのだろうか？

「いるんだしたら、とつくに見つかってなくちゃ、おかしいわよ。
虫や微生物じゃないのよ？ 小動物でもない。そんなのが、ここ何年も、何十年も、何百年も……ううん。人類が誕生して今まで、何万年も見つかってないのよ？ おかしいでしょ？」

「確かにおかしいかもな。けど、本当に見つかっていなかったのか？ 中世、暗黒と呼ばれた時代。人の世がまだ科学技術に完全に支配される前の時代。吸血鬼は、吸血鬼を含めた幻獣は、確かに目撃証言があったんじゃないのか？ だから伝承や伝説に、それらの存在が残ってるんじゃないのか？」

「そ、そうかもしれないけど、でも、ここ百年近くは、そんな迷信の生き物なんて、一匹も見つかってないわよ！」

一匹も？

怪しげなテレビ番組やゴシップ誌なんかでは、たまに発見の話を聞くけども。

「そうだな。ユウナの言う通りだ」

あっさりとハクは自論を引っ込めた。けどぼくは、気づいてしま

った。

「うわっ」

気づいて、自分の考えに驚きの声を上げてしまう。

「どしたの？ キョウちゃん？」

不思議そうに向けられる視線。ぼくは口を開く。

「けど、うん、確かに、今まで見つかつてこなかったことはおかしい。変だね。不自然さを感じる。そんなものが人間世界から隠れて生き延びられるほど、世界は優しくないと思う。けどね——」

ぼくは、いったん言葉を止める。

「けど、吸血鬼が人間以上の技術を持っているのならば、別だね」
そこまで言って、ぼくの言葉が皆に浸透するまで、待つ。

「つまり、人間なんかよりも、ずっと強いつてこと？」
とユウナ。

「つまり、人間ごときなどとは比べ物にならないほどの、高度な技術を有しているということか？」

とハク。

「一概にはそうとも言いきれないと思うけど。少なくとも、姿を隠す技術では、人間より優れた技術を持っているにちがいないと思う」

「それは？」

「わからないさ。ぼくは吸血鬼じゃないし。けど、その技術を使えば完璧に、人間社会から消えることができる」

「ふむ、犯人はここ一世紀か二世紀の永きに渡ってずっと人間社会からは完璧に姿を隠した吸血鬼……か。とてもではないが——」

ぼくらに見つけられるとは思えない。

隠れる、その手段がわからなければ。

その二言を、ハクは口に出すことはしなかった。

けれども伝わってきた。

「警察にも、たぶん無理だね」

言つと、少し驚いた表情をして、ハクは、笑った。珍しく。

「迷宮入りかな？　里穂ちゃんには悪いけどな」
苦笑。

まだすべてが終わりではないから言える、本気じゃない弱音。
まだ可能性が残っているから言える、冗談交じりの敗北宣言。
「けどそれって、吸血鬼が本当にいたら、の話でしょ？」

首を傾げて、チコは言った。

その通り。

もしも吸血鬼がいるのなら、の話だ。

もしも犯人が本物の吸血鬼ならば、の話だ。

その可能性が低いことはすでにハクによって指摘されている。

吸血鬼がいないのなら、それでなくとも、犯人が吸血鬼ではないのなら、まだ事件が解決する可能性は十二分にあっだし、里穂に真相を知らせることもできるかもしれない。

吸血鬼がいるなら？

ブラム・ストーカーの創作じゃないかと、ぼくは思っていた。けれども、ハクの言うところ、世界各地に吸血鬼伝説は、実際に存在するらしい。

かつては多く、様々な形で存在していた吸血鬼たち。

異端。

かつてはその存在が知られていて、今は見られないのはなぜだろう？

「吸血鬼がかつては存在していて、現在は存在していない、その理由は何か？」

独り言のようにつぶやくハク。

「まず一に、吸血鬼などというものは、科学が未発達の時代の迷信である可能性」

つまり、もとより存在せず、夜の闇の妄想から生まれた架空の存在であるということ。

「第二に、かつて吸血鬼は存在していたが、今は絶滅した可能性」
確実に存在が確認されるよりも前に、絶滅した。なるほど。吸血

鬼なんてものが存在すれば、人間たちは問答無用で狩るだろう。動物保護なんて言葉が存在しなかった時代もあるのだ。むしろ、存在しなかった時代の方が、圧倒的に長い。人間の手によって絶滅させられた生き物の、なんて多いことか。吸血鬼もそれらの中の、ひとつなのかもしれない。

「第三に、吸血鬼の探知方法を人間たちも以前はもっていたが、今は失われている」

それは——なんだ？

少し、やな予感がする。

「……他にはないか？」

「あ、あるよっ！」

話をそらすつもりで、反射的に声を上げてしまった。いや、あるのは本当だけど。

「ええと、第四に、吸血鬼とは一定条件下で人間の中から生まれてくる亜種であり、その存在条件は恐ろしく厳しいため、ここ数百年ほどは出てこなかった、とか」

「なるほどな」

「あ、まだあるよっ！」

ユウナが叫びながら挙手。

「第五は、アメリカが隠してるの。M I B！ X - F I L E！助けてっ、モルダーっ！」

ユウナは相変わらずユウナだった。

まあ、いいけども。

「とりあえず、五番目のは政府が関わってるので手を出すのは見合わせよう」

ぼくが言つと、

「ああ、そうだな」

ハクもうなずいて、

「ええーっ！ どーしてっ！」

ユウナが騒いだ。

「いや、政府を敵に回すには、さすがに色々準備しなくちゃいけないし、パスポート持ってないし。とりあえず後回しにしようかと」
「う、うぐう」

がつくりとうなだれるユウナを、チコが背中を抱いて慰める。

——なんだ、ぼくは悪役か？

「第一と第二については、吸血鬼がいらないと言っただから、考慮する必要はないだろう」

「第四は？」

「特に特殊な捜査をする必要性は感じられないな。普通に調べとけばいいだろう」

どこか投げやりな調子で言うハク。

「じゃあ、三番目は……って、なんか、凄く、やな予感がするんですけど……ハク様」

「人間も、以前は持っていたが、失われた、探知方法だな」

「うわっ。一言一言、やけに強調するように言うし。」

「……なに？ それ？」

きょんとした表情で、チコが尋ねる。

「ぼくは、喋らない、が、ハクの視線はまっすぐに、ぼくに突き刺さっていた。」

「キョウがそれを、苦手に行っていることは知っている。だがな、嫌っているわけじゃ、ないんだろう？」

まあ、そうだけど。

その手段を採るには、ぼくが『キョウ』と呼ばれる以前の知り合いに、シユン以外の知り合いに会わなくちゃならないから、杜代家にいるころのぼくを知る人物に会わなくちゃならないから、少し、いや、激烈に、気まずいだけ。

「はあ……仕方ないか」

ため息をつく、ハクはうなずいてチコに振り向き、言った。

「魔法だよ」

Chapter 3 死の原因／七日目 その2（後書き）

作中で、吸血鬼に関する例が、やたらと古いのは、この物語が書かれたのが今から9年くらい前だからです。修正しようかと思いましたが、やめました。

Chapter 3 死の原因／七日目 その3

素土の街の『闇』と呼ばれる領域の、さらに奥にある特殊な空間へ。

路地裏の路地裏へ。さらにその路地裏へと抜けて、ぼくらは歩いていた。

辺りにはギリギリ非合法の売春宿や闇金融が、看板も掛けずに立ち並んでいる。

視線は痛いほど感じるが、誰も声を掛けてくることはなかった。このルートを通ってくる者に、話し掛けてはいけない。

ここは黄泉への旅路。異界への通路。通るのは異界への巡礼者。話し掛ければ、引きずり込まれてしまう。

怪しげな、噂によく似た、けれども現実に存在する、脅威。

「心配するな。この道を通っていれば、安心だからな」

不安な表情を隠せないチコに、やけに優しくハクが声を掛ける。珍しい。

「どうしてこの道だと、安心なの？ さっきからぐるぐると、わざと遠回りしているみたいだけど？」

「やっぱり言うかさすがと言うか、怪しげな空気の中いつもと変わらぬ調子でユウナがぼくに尋ねてきた。」

「その通り。わざと遠回りしてるんだよ。決められたルートを通って彼女のところまで行くのがルールなんだ。ルートを外れなければ何も起きない。もし起きたとしても、ぼくらの方は安全だよ」

「どこに行こうとしてるの？」

「魔女のところだよ」

「占い師だ」

ハクがぼくのセリフを訂正した。ぼくは肩をすくめて、後を継ぐ。

「『楽土』って名前の、婆さん。この町一番の占い師さ」

「占い師って……魔法？」

ユウナは少し啞然とする。無理もない。いきなり『魔法』なんて言われて、不信に思わない方がどうかしている。

「どうかな？ 本当に魔法を使っているのかどうか、ぼくにはわからない。けれども彼女は何でも知っている。この町最高の情報屋だよ。暴力団とも関わりが強い。だからさ、このルートを通るのは彼女の客である証拠。客に何かをすれば、彼女からどんな報復を受けるのか、わからない。以前は実際に、とんでもない目に合わされたものもいるらしい。それこそ『友達の友達』の噂だけだね。彼女の客に手を出すなんて命知らずは、この街にはいないさ」

「ああ、なるほど……そういうことかあ。魔女に逢いに行くなんていうから、二人とも頭が変になっちゃったのかと思った」

「おい」

いつもの軽口だった。

「ま、そういうことだな」

ハクは笑いながらうなずいて。

「ちなみに少しでも道を外れると彼女の客である資格が失われて、あつという間に囲まれて、身包みはがされ、監禁され、男はコンクリートに詰められ光花湾に静められ、女は犯され、クスリ漬けにされ、東南アジアに売却、だな」

いや、ハクさん。笑いながら言わないでほしい。そんなこと。

何事もなく一軒のビルの前まで辿り着いた。

ビルとは言っても、コンクリート剥き出しの建設途中で放つて於かれたような様子のもので、装飾と言えば二階のガラスの嵌められていない窓から垂れ下がった、シンプルな布製の看板だけだった。看板には緑の地に赤い文字で『楽土の館』と記されていて、後は青い直線の縁取りがされているだけだった。

階段で五階まで上がる。

ハクが扉を開けようと近づいた瞬間だった。

音を立てて扉は自動的に開いた。外側に。

「うわつと」

開いた扉にぶつかりそうになり、ハクは慌てて後ろに飛び退いた。そこに投げかけられる、つまらなそうな声。

「……そんなに驚かなくても大丈夫よ。当たらないように開けたんだから」

二十代中ごろの、紺のスーツを着たメガネの女性が冷たい目ではくたちを見ていた。

楽土の婆さんの、弟子。

魔女の弟子、紺野さんだ。

「そんなこと言ったって紺野さん、この前はわざとぶつかるようにして開けてきたじゃないですか」

ハクに代わって文句を言うと、冷たい目で睨まれた。

「この前の時はタイミングを誤ったのよ」

やはり紺野さんはつまらなそうに言って、顔を背けた。

……照れたのだと、好意解釈しておくことにした。

「——あの、あたしたちが来ること、わかっていたんですか？」

チコが遠慮がちに尋ねた。紺野さんはつまらなそうに振り向いて、つまらなそうに応えた。

「《斑の賢者》と《紅十字》の連れにしてはつまらない質問ね。そんなの、決まってるでしょ？」

敵意とも解釈されかねない、冷淡な口調にチコはびくつと怯えたように後退りする。

「監視カメラを隠してあるんだよ。赤外線警報装置も、そこら辺にあるのかもしれない。そもそも、遠回りして来たんだから、とつくに客が来ることの連絡は行ってるだろう？」

と、ハクは優しい声でチコに説明した。

「魔法でわかったのかもしれないけどね」

ぼくはややつまらなそうに応えた。

そんなぼくたちを無視するかのように紺野さん、部屋の中に戻り、「早くついてらっしゃい」

鋭い命令口調でおっしゃった。相変わらずの性格のようだった。ま、もつとも愛想の良い紺野さんなんて、不気味だけれども。

「――なあに？　今の人が占い師？」

啞然としたようにユウナが小声で話し掛ける。

「紺野さん。《魔女の弟子》だよ」

いいながらぼくは、用意されたスリッパに履き替え、玄関から廊下に入る。

玄関から覗ける廊下の様子は普通のアパートとそう大して変わらない。魔術道具や奇妙な装飾が飾られているわけでもない。どこにでもある普通の民家のようだった。案内され、部屋に入るとまた様子は違って、一流企業の応接間のような高い調度に囲まれる。いかにも高そうな黒い漆塗りのテーブルの向こうに、座り心地の良さそうなりクライニングシートに寝そべるようにして、一人の老婆が体を預けていた。

老婆は人の良さそうな笑顔でぼくらを迎え入れると、楽しそうに口を開いた。

「久しぶりですね。《斑の賢者》に《紅十字》——お変わりないようで。その他の方々は始めましてですね？　ようこそ《楽土の館》へ……わたくしが《魔女》——楽土です」

その隣には、相変わらずつまらなそうに紺野さんが立っていた。

「お婆さんはずいぶんと人の良さそうな振りをするのが上手になりましたね」

ぼくが言うと、ユウナとチコはぎょつとしてぼくを見返したが、楽土の婆さんは平然と、むしろ楽しげに体を揺らして笑った。紺野さんはつまらなそうな表情のまま、変わらない。

「相変わらずですね、《紅十字》——お兄様とは仲直りなさいましたか？」

うぐつ。いきなり身内のことを持ち出してくるとは。

「まだ、だよ」

「そうですね。いつでも機会があると思っては、ダメですよ。先延

ばしにしていると、永遠に逃してしまうことになるかもしれません」
「どういう意味ですか——それは？」

「特に意味はありません。一般論、いえ、軽口です」

楽土の婆さんの言葉を素直に信じることはできなかった。

何せ情報制御、情報支配の達人だ。何かしらの情報を得て『機会が永遠に失われる』結論に達したのかもしれないし、本人の言うとおり、本当にただの説教めいた一般論にすぎないのかもしれない。どちらかはわからない。彼女が本物の魔女なのか、突出した情報の達人なのか、わからないように。

「それより『楽土』——少し聞きたいことがある。教えてくれないだろうか？」

ハクの言葉に『楽土』の婆さんは笑顔のままうなずいた。

「あの日『ネコノミクロン』というチームの少年、タロウ（仮名、十六歳）が用を足すために公園裏の丘へ登っていきました。公園にはトイレもありましたが、その場所は昨夜から何人かの女性が陣取っていて、少年としては少し近寄りがたかったようです。彼は草の多い茂った登山道を登っていきました。それほど高くない丘です。で、五分もすれば頂上付近に出ます。頂上付近には大きな岩があり、ちよつとした展望台になっていました。彼は酔い覚ましに岩に登り、周囲を見回しました。公園は散々な状況でした。あちらこちらに酔っ払って倒れている人が、公園の外の道路まで溢れているのが見えます。岩のすぐ近くで、倒れている女性を見つけました。酔いつぶれて寝ているものと、特に疑問を感じずに近づいていきました。それが、寺田志保さんだったのです。タロウ少年は第一発見者になりました」

一気に語って、婆さんは得意げに微笑んだ。ハクは苦笑して。

「死亡推定時刻は？」

「午前〇時から午前三時ごろまでの間です。午前〇時過ぎに、丘へ登っていく志保さんの姿を何人もが目撃しています。その時、連れの姿はありませんでした。死因は後頭部への打撲による、脳挫傷。」

ほぼ即死だったようです。あと、志保さんの首筋には二つの小さな穴が開けられていて、そこから血が垂れ流れ、地面に染み込んでいった、とされています。この作業は、死後か、死の直前に行われたと考えられています」

「……なんか、それだけ聞くと、どこにでもある当たり前の殺人事件のように聞こえるわね」

首をかしげながらチコはつぶやく。

気持ちはいくらかわかった。

吸血鬼とか、マントとか、装飾殺人とか、派手なアナウンスを事前に聞いていただけに、現実のシンプルさに違和感を覚えるのだろう。

「普通の殺人事件だったんですよ。吸血鬼っぽい演出をしているのは、実際のところ首筋の二つの穴だけ」

「血液が抜き取られていた、ってこともない？」

ぼくは訊いた。

「抜き取られていたとしても五〇〇ミリリットルもないでしょう。

……若干貧血気味に感じる程度で、ほとんど意味のない行為です。

少なくとも、失血死などではありません」

それは——演出なのか、何らかの行為の過程で偶然そうなっただけなのか、わからない。本当に吸血鬼の演出だったのなら、もっと凝った演出をしただろう。

「タダシが発見者と聞いてたんだが……」

「当初の発見者情報では、そうでしたね。タロウさんは一度逃げ出して、すぐに戻ってきたようです」

「怪しい人物は見かけなかった？」

「何人かのカップルが丘に登っていくのを目撃されていますが、たった一人で登ったという目撃証言はシホさんのものしかありません」

「《Silver Bullet》の噂は本当なのか？」

「本当です。クスリも、売春も。両方とも斡旋で、自身では決してやらなかったようです」

「へえ……何かトラブルはあったのか？」

「いいえ、特に目立ったトラブルは、ありませんでした。ただ、彼女の死後、かなりの数のクスリが、タダシさんの手によって持ち去られ、売春組織の方も、トッブが死んだことによって、事実上、機能停止しています。個々人での活動は継続しているようですが《クレスト》は個人裁量の売春は禁止していませんので、今後トラブルの火種になる可能性は少ないでしょう」

「は——？」

それはどういう——？

「ちよつと待つてっ！」

ユウナが叫んだ。

「ひよつとして《Silver Bullet》のリーダーは、タダシじゃなくて、シホだったとも言っの？」

「いいえ、リーダーはあくまでもタダシさんですが、彼に管理能力はありませんでした」

それは、つまり。

「トラブルがあったのは《Silver Bullet》内部ということ？」

ぼくは、訊く。《楽土》はおつとりと笑って、うなずいた。

「警察はその方向で捜査していて、《異種の王》も、先ほどうらして、同様の結論に達したようです」

《異種の王》——つまりはフジヤのこと。フジヤも来てたのか。

ぼくは、ハクを見た。ハクはこのことに、気づいていたのだろうか？ 《Silver Bullet》の仲間割れという、可能性いや、考えていなかったことはないはずだ。可能性の一部として、考慮に入れていただろう。

第一容疑者はタダシということ。

現に彼は今、行方を眩ましている。

「ただ、タダシさんにはアリバイがあります」

「アリバイ？ それこそ、どうとでも証言できるようなものでは？」

「そうですね」

「一〇〇人中、いったいどれほどがタダシのアリバイを証言しているのか？」

「そもそもシホは、何の目的で丘に入っていったのか？」

「逢引の痕跡は？」

「シホさんの遺体には、性交の痕は見られませんでした。抵抗の様子もありません」

「背後からいきなり殴られたということ？」

「わたくしには、答えられません。わたくしたただ、画材を提示するのみ。絵を描くのは皆様です」

——そう、そうだったな。

《楽土》は推理しない。

求められた情報を、ただ提示するのみ。

何年も前から変わらぬ、ルール。

基本原則。

未来を見ても、何も言わない。

忠告もしない。

よく言う。

悪い冗談だ。

表向きではそう、隠者の振りをしても、裏ではどんな計算をしているのか、わかったもんじやない。

情報の流れの最下底に、常に彼女はいるのだ。

ほとんど魔法めいた、おそらくは、純然たる技術。

魔法と錯覚してしまうまでの、技術。

けれども、そこまで極まった技術は、魔法と、魔法による占いや未来予知と、どう違うというのだろうか？

「他に何かお訊きたいことはありませんか？」

わかつていくくせに、わざとらしく《楽土》の婆さんは尋ねる。

何を聞きたいのか、何をしたいのか、ぼくは、ここに、何をしてきたのか？

「……吸血鬼は、いるのか？」

ハクが尋ねた。ここへ来た、目的。

「それが今回の犯人を指す隠語ならば、存在する、と申し上げます」

「じゃあ、本物の、吸血鬼は、いるのか？」

「いるともいないとも、お答えしかねます」

「どういう意味だ？」

「どちらとも言える、という意味です。言葉の意味は複合的です――

――《紅十字》――騙されないように」

なぜかその言葉はハクに返したのではなく、ぼくに向けたものだった。

騙そうとしているのは《楽土》の婆さん、あなたではないのですか？

心の中で思っても、ぼくは何も口には出さない。

ここに来てわかったことは、ぼくらは事件について、何も知らなかったということ。

「あ、あのっ！」

これまで黙ってぼくとハクに場を任せていたユウナが唐突に挙手と共に声を上げた。

「なんでしよう？ お嬢さん」

「さっきから言ってる《斑の賢者》と《紅十字》って、何ですか？ それは、ぼくが聞かれたくないこと。

「《斑の賢者》はそこにいて、様々なものに属しながらも何の色にも染まりきらない賢者のこと、そして――」

ハクの表情は変わらない。

ぼくの表情は、ひどく強張っていたと思う。

「《紅十字》はその、古き七家の末裔たる者の、かつての業ですかつての――業？」

ユウナはぼくを見る。

ユウナの視線と、チコの視線。

ぼくは首を左右に振る。ユウナははっと、何かに気づいたように

目を開き、慌てたように目をそらした。

ぼくは《楽土》の婆さんに目を向ける。

「最後にひとつ、尋ねます」

「どうぞ」

ぼくは訊いた。

「警察も、ここに来ました？」

「ええ、刑事さんが二人ほど。あなたたちもよくご存知の、お二人ですよ」

あの愉快な二人の刑事。

さすがにあの二人が捜査の中心にいるとは思えないけれど――

「そうですね、ありがとうございます」

ぼくたちはお礼をいって、館を後にした。

ぼくたちは、何を得たのか？ 何を知ったのか？

それとも、何かを失ったのか？

帰りの路地裏でユウナが不思議そうに尋ねてきた。

「お代とか……見料は、要らないの？」

応えたのはハク。

「いないさ。あの婆さんは、別に《占い》で食べているわけじゃない」

その通り。占い師は、職業じゃない。彼女は魔女。

占い師は《情報》で食べている――いや、《情報》を食べているのだ。

魔女は《情報》を操作することによって、自動的にお金が流れ込んでくるシステムを、とつくの昔に構築している。

ゆえに彼女は、わざわざ見料を取るようなことはしない。

自分の都合にいい情報を都合のいいように流すだけ。

そして、流された情報は巡り巡って再び《楽土》の元へ、彼女にとっての利益を乗せて戻ってくるというのだ。

そんなとてつもないシステム。

限りなく魔法に近い、信じられないような現実。

ぼくは、ため息をついた。

Chapter 4 原因の反転／八日目 その1

翌日の早朝、まだ夜が明けて間もない時間に、ぼくは独り、新天地第三公園へ来ていた。

園内にひと気はなく、肌寒い風がゆっくりと木の葉を揺らしていた。

公園の奥、ブランコの裏に、丘へと上る細い道がある。獣道のようない道、頼りのない道。

道は基本的には一本道だが、獣道らしくいくつもの枝道が藪の中へ延びていた。藪の中に、何か白いものが見える。近づいていってみると、それは使い捨てにされた、コンドームだった。

ああ、まったく。

つまり、何人かはわからないが、この藪の中で逢瀬を楽しんだものがあることは、確かなのだ。

あの日、宴会のあった日は、どうだったろう？

すぐ近くに一〇〇人も人がいる傍で、できるか？

できるだろう。もっと開けっ広げに、誰かが見ていようと、やってしまう人がいてもおかしくはない。

いつのものなのか？

触って調べる気には到底なれず、ぼくは引き返そうと振り向いた。

「わあっ」

振り向いて、びっくりした。

いつの間に来たのか、ユウナが立っていた。

ユウナは徐にうなずくと。

「こんなところするなんて、処女のわたしには信じられないわ。不衛生よ」

「うわっ。珍しく常識的なことを——って、まて」

今、変なことを聞かなかったか？

「え？ 不衛生？」

「ちがう、その前」

「信じられないわ？」

「もう一声」

「処女のわたしには？」

「……………」

えっと。

「………… 処女？」

「あれ？ 知らなかった？」

あー、今まで散々えろいことばかり言ってきた、処女ですか。処女と来ますか。まだシたことがないですか。

「ほー。ふーん。へー」

「貰ってくれる？」

どうやって？

ぼくは答えずに、ユウナの脇をすり抜け、獣道を再び登り始める。登りながら、ぼくの頭の中で、思考が渦巻く。

さてはて。

はたしてユウナが処女と言うのは本当のことだろうか？

……

……

……

……

…… 違う。

考えるのは、そっちじゃなくって。

…… えっと。

誰も怪しい人を見ていないと言うのは本当だろうか？

こんな場所を夜中、独りで登っていくなんて。きちんと整備された道でもないし、明かりもない。目的は何か？ 展望岩に登って、夜景を楽しむこと。夜景なんて、たいしたものは見えない。夜のデートスポットに挙げられる港周辺の公園も、見えないことはないが、その光景を楽しむには、丘は少し低すぎるだろう。けれども、まっ

たぐいがないとも断言はできない。丘の上からは新天地湾岸第三公園が一望できる。公園の全体の様子を監視するには都合の場所だろう。けれどもあの日、監視者はいなかった。フジヤ辺りが置きそうなものだけでも、あの日の宴会は突発的なものだった。監視者を置いてなくても、まったくおかしいことではない。

ああ、わかんない。

監視者なんてものがいたら、とつくに事件は解決しているだろう。第一容疑者のタダシは行方不明だし。

しかし、クスリなんてものを持ち出していれば、とつくに足がつきそうなものじゃないか？

捌くには、独りでは危険すぎる。となると、ひょっとしてこれは、タダシ一人の犯行ではなく、裏には組織が関わっているのだろうか？

例えば、藤沢組と対立するような、組織。

暴力団に詳しいわけじゃないから、どんな組織が藤沢組と対立しているのかわからなかった。

昨日《楽土》の婆さんに聞いておけばよかったかとも思ったが、さすがに暴力団が関わっているとすると、ぼくらの手には余る。フジヤの《クレスト》でも、対抗するのは危険だろう。

——と、登りきってしまった。

目の前には岩。

そして、岩の上には人影。

「やあ、キヨウ、ユウナ。早いな」

ハクだった。

「ハク。どうしてここに？」

岩をよじ登りながら訊くと、ハクは手を伸ばしてきた。その手をつかんで、登る。

「いや、なに。ちょっと現場を見ておこうと思ってな」

続いてユウナも登ってきて、ぼくは彼女に手を貸す。

「あー、どうしてハクくんがいるのお？ せっかく、キヨウちゃんとデート気分だったのに！」

登るなり、いきなりハクに詰め寄るユウナ。徹頭徹尾、ユウナはいつも、変わらないノリ。ハクも苦笑して、

「ごめんな。悪かった」

答えた。するとユウナは満足したのか、

「うん。ま、ハクくんならしょうがないね」

「なんでハクならしょうがないんだ？」

ハク以外ならダメだ、みたいなセリフだ。

「だって――、必要でしょ？」

ユウナのセリフの意味は、よくわからなかった。わからないので無視して、ぼくは丘から公園を見下ろした。

「それで――遺体があったのは、どこなんだ？」

ハクにたずねるが、ハクはなぜか周囲に視線をさ迷わせて。

「どこだっけな？ ユウナ？」

ユウナに訊ねた。珍しい。事件の情報を、ハクが忘れるなんて。

「んー？ あそこだよ」

丘の中腹に向けられたユウナの指は、適当な場所を指しているとは思えなかった。

藪が覆っていて、特に何かが目立つということもなかった。

そりゃあ、ここに来て、何かがわかるなんて思ったわけじゃない。けれども、まったく期待していなかったわけでもなかったから、ほんの少し落胆した。

何にもない――ここから観るのは、いつもの街だ。素土の街。

振り返って、ユウナを見ると、彼女は公園とは反対側を眺めていた。

遠くに京橋川が。本来の花見の会場だった、河岸公園が広がっている。桜もほぼ散ってしまっていて、物足りなかったけれども。

それよりずっと手前は、ユウナのマンションがある湾岸町。探そうと思って視線を巡らしていると、丘とユウナのマンションを結ぶ直線状にコンビニがあることに気づいた。ああ、そういうば――

丘は、公園からじゃなく、湾岸町側からでも登れたのだ。

けれどもまだしも公園の明かりがある、新天地町側の方が登りやすいだろう。

湾岸町側も街灯や住宅があるのだが、その数は新天地側のものよりも遥かに少ない。夜になると、本当に何も見えなくなるんじゃないかと、思えた。

そうだ——こっちから登ってきたのなら、誰にも見咎められずに、あの日、あの夜、シホと接触することができたのかも、しれない。

それこそ、密会だけでも。

タダシだけじゃない。シホの行動も謎で、怪しい。

あの夜何があつたのか？

あの夜何が起きたのか？

「……ハク。本当はお前、もうわかってるんじゃない？」

ふと思いついたように、尋ねてみた。

ハクは薄く笑った。

「色々わかってるさ。ただ、どうしてもまだ、つながらないことがある。道が足りないか、途中で閉止められているんだ」

「——つながらない？」

何を、どのように？

「なぜ、吸血鬼の、装飾を、遺体にほどしたのか？」

「吸血鬼って——それはもう、解決したんじゃないのか？」

「何が？」

「だって——」

吸血鬼の仕業だとされた痕跡は、噂のような大げさなものではなく、はつきりとしたものではなく、ただ首筋の二つの穴のみ。血が失われたのかどうかさえわからない、かすかな痕跡。

「吸血鬼の素があまりにもちっぽけなものだったからといって、『存在していない』と錯覚してやいないか？」

「……え？」

「どんなに小さなものだろうと、それは確かに存在していたんだ。あるものをないと、無視してしまつては、問題は解決しないさ」

ハク様の言うとおり。ぼくは無意識に、すでに吸血痕のことを忘れていた。

《楽土》の婆さんの言葉を聞いて、なんとなく、吸血鬼の装飾はなかったのだと思い込んでしまっていた。

《楽土》の言った『騙されるな』とはこのことか？　なんて皮肉だろう。いや、《楽土》の婆さんの言いたかったことは『自分の言葉を勘違いしないように』という意味だったのかもしれない。『騙されるな』は純然たる善意の忠告。

「じゃあ、ハクは、吸血痕について、今何を考えてるの？」

ユウナが尋ねた。ハクは少し考え込むように中に視線をさまよわせた。

「そうだな——まずはキヨウが無意識に採用していたように、殺害の行為の副産物として偶然生成された、という可能性」

考えを決め付けられてしまった。けれどもたぶん、ハクの言うとおり。

「他は、犯人の気まぐれという可能性」

「気まぐれ？」

「意味はない——単なるお遊びの可能性だな。他には、首筋の二つの穴が、何かを暗示、もしくはある種の人間にとっては明示する、暗号になっている可能性」

「……よくわからない」

「犯人の、誰かに向けたサインかもしれない、ということさ」

そうだとすると、ぼくにはまったく想像もつかない。二つの穴。

犯人は吸血鬼だというサイン。もしくは、犯人は吸血鬼だと誘導させようとするサイン。どちらにしろぼくには『吸血鬼』と聞いて思い当たる人物はいなかった。

「あとは、そうだな、吸血鬼が実在する可能性だな」

「……まだ言うの？」

呆れたようにユウナがもらした。まったくそうだ。この期に及んで、吸血鬼の存在から論じるなんて、ずいぶんとまあ、バカバカし

い。ライオンに食い殺された人の死体を見て、ライオンという種の実在から論じるに等しい——正反对だが——検証だ。けど、ハクにとっては、きつと重要なことだったのだろう。

「吸血鬼が実在するとして、首筋に二つの穴を開ける必然性は何だろう？」

「血を吸うためだろ？」とぼく。

「ええと……食料……として、それが……」

「仲間にするため？」

「そうだな。食料にするのは一般的に精気を吸うためだとされている。けども、血が抜かれたのは死後、もしくは死の直前とされている。死につつある相手から、精気を奪うようなことを、わざわざするか？」

「ええーと……」

精気とは生命根源の力。精神と気力。なるほど。食料にするのなら、撲殺する前に、行っだろう。

「食料にしようと、力余って撲殺してしまったのか？ それとも、仲間を作ろうとしたのか？」

「仲間……」

「吸血鬼の仲間の作り方は一般に体液交換で行われるというな。相手の血を飲み、相手に血を飲ます。シホの胃の中には、犯人の血液があつたかもしれない。もう、燃えてしまつて、確かめようはないが」

「——そうだ、里穂ちゃんの言っていた……」

火葬場の、扉の奥から、叩く音。悲鳴。蘇った死者。

「忘れていたな？」

そうだ。忘れていた。確かにつながらない。全然つながらない。吸血鬼が、本当に実在すると思えないと、つながらない。

呆然と、ぼくは顔を上げ、ハクを見た。ハクはどこまでも真剣な表情でぼくを、ぼくと、ユウナを、見ていた。ぼくはユウナに視線を移し。彼女の顔が、なぜか赤く染まっているのを発見した。

「いやん。ハク様ったら。体液交換なんて」

「……おい」

なんで、こうなのかな。この子は。

どうか、頭の配線がねじれてるんじゃないだろうか？

「ま、なんにしろ、この段階でできることは、ここまでだ。いや、もう少し、いくつかはあるがな」

ハクは全然気にせずに、明るく言った。

誰が何をどう言おうとハクの世界を揺るがすことはないのだろう。きつと。

「二人とも、朝食は食ったか？」

ぼくは首を左右に振る。

ユウナは首を縦に振る。

「そっか。おれはまだなんだ」

困ったように言って、ハクはユウナを見る。

「んー、とりあえずわたし、一度家に帰る。今日は大学に行くつもりだし。二人でこゆつくり。じゃーね」

にこやかに笑って、ユウナは岩を軽やかに飛び降り、湾岸町の、自分のマンションの方へ、丘を一気に駆け下りていった。

ぼくは岩を叩いて、結構な高さがあることを確認し、うわ、ここ、飛び降りるか？　とか思ったのだが飛び降りて、何事もないように駆けて行ったので、きつとユウナにとってはなんてこともない行為だったのだろう。

「すごいな」

感心したようにハクがつぶやき、そのつぶやきを合図にぼくも岩を降り、ユウナとは反対の方角。新天地第三公園側へと丘を下っていった。

「あれ……？　二人とも、なんでそっちから？」

丘から降りてきたぼくたちを見つけたチコが、きょとんとした表情で問い掛けてきた。

公園には他にもシユンの姿もあり、どうやらチコと二人で何か話していたようだ。もちろんシユンは喋らずに、一方的にチコの話の聞くだけだったのだろうが。

「ああ、偶然上で会ったんだ」

ぼくは応えたが。

「ふーん。そうなの？ ハクウ？」

なぜかわざわざハクに訊き直すチコだった。

信用されてないのかなあ？

「ああ、偶然だ。たまたま、現場を見に行ったらな」

「ふーん。二人つきりで？」

「いや、ユウナもいた」

「ユウナ？ いないじゃない？」

「大学に行くといつて、向こう側から帰っていったよ」

「大学に？ どうして？」

どうしてって——大学生だからじゃないのか？

ぼくも高校生だけど。行ってないけど。

「信じれない！ ユウナが、キョウと会うより大学を優先するなんてっ！ ありえないっ！」

……なぜ？

ぼくにはチコの言葉の意味はわけわからないものだったが、チコにとつてしてみれば、かなり衝撃的なことだったようで、しばらく彼女はぶつぶつとつぶやき続けていた。

というか、ぼくは、ユウナのあの態度はただの冗談の類だと思ってるし。

……冗談じゃなかったらどうしよう？

いや、たとえ冗談だとしても、ああも当たり前、常態で、変わらないノリでいるのなら、それはもはや本気と区別がつかないのではないか、なんて思ったりもして。

ちよつと怖いかも。

普段、チコはぼく以上にユウナと仲良くしているみたいだし。何

か聞いている可能性も無きにしも非ずだと思っけれど。

「チコたちは、もう食べたのか？」

ぼくたちの会話がなかったもののようにハクがチコに話を切り出す。相も変わらず過程がすっ飛ばされているために今ひとつ意味をつかみにくい言葉。『朝食を』が抜けてる。

「何をにや？」

「朝食だ」

チコは首を左右に振る。

シユンは首を縦に振る。

それを見てハクは満足げにうなずいた。

「今からキヨウと一緒に喫茶店にでも行こうかと思うのだが、一緒に来るか？」

あれ——？

いつの間に一緒に食へに行くことになってたんだ？

確かにユウナは指図するような言葉を発したと記憶しているが、ぼくは承諾した覚えはない。

まあいいんだけど。否定したわけじゃないから、消極的合意と解釈されても問題はないと思うのだけれども。事象の正確性、完全性を重視するハクが、ぼくのことを明確に確認せずに決め付けるなんて、おかしい。珍しい、というより、何か不自然な感じがする。

ハク以外の人間の言葉ならば、自らの無意識の解釈に気づいていない可能性もないと思うが、よりによって、ハクに限って言えば、そんなこと、あるはずがない。

つまり、ハクの言動はわざとで、けれども何で、そんなことをする必要があるのか、ぼくにはわからなかった。

ようするに、喫茶店でぼくと何か話したいってことだろうと思うけれども。

事件のことだろうか？

けど、なぜわざわざこんなやり方をする？

「んーいいよ。二人で行ってきて。あたしが朝食べないって、ハク

は知ってるでしょ？」

笑顔でチコは言った。ぼくと視線が交差する。

一瞬――、

チコは、ぼくから視線をそらし。

すぐに視線を戻して、ややわざとらしいくらいに笑顔を見せた。

――ん？

なんだか変だ。

この反応は何だろう？

ハクと、チコの反応。

「そうか、じゃあ、行くか」

あっさりつぶやいて、ハクは歩き出す。ぼくの反応も見ずに。

「うん、行ってらっしゃい！ シュン君はどうするの？ 学校？」
シュンは静かにうなずいた。

「ほら、キヨウ、ハク、行っちゃうよ」

「え？ あ、ああ。うん……」

どうしても釈然としないものを感じながらも、ぼくは急ぎ立てられるようにハクの後を、やや駆け足で追った。

ハクの態度も、チコの態度も変だった。何か演技を見せられているような。それも少し違う。何かこの状況にぴったりと当てはまる言葉はないかと考えて、ぼくは一つの言葉を思いついた。

半年前に練習し一度成功した演技を、半年後の今日になって初めてぶっつけ本番で行って、再び成功したような――

……

自分で思いついておいて「なんだそれは？」と強く思う。

けれどもどうしても離れない予感。

そうだ。さっきのチコのセリフじゃないけど。

いくら朝は食べないことにしているからって、チコがハクの誘いを断るなんて――

それに、何より不可解なのが、ハク自身がそんなチコの反応を、完全に予測していた風なこと。

つまりハクは、ぼくと二人きりになろうとした？

—— 釈然としない回答。

混乱を振り払うように頭を振って、前を歩くハクを見る。
公園の出口。

ゆっくりと近づいてくるバイク。

二輪。

二人乗り。

ノーヘル。

茶髪と金髪。

バットと角材。

「危ないっ！」

ぼくは叫んだ。

Chapter 4 原因の反転／八日目 その2

近づいてくるバイクに気づいたハクは、その場でいきなり、背後に体を倒した。

後転の要領で一回転するハクの顔の真上を、振り回された角材が通り過ぎていく。ハクの想定外の行動でバランスを崩したのだろう。通過しかけたバイクは車体を不安定に揺らす。急ブレーキと共に、バイク後部の荷台に座っていた少年が飛び降り、ついで転倒しかかったバイクから避難するように運転手の少年も飛び降りた。

飛び降りた少年たちはわずかに戸惑っているようだったが、すぐに目的を思い出したのか、それぞれバットと角材を構え、倒れたハクに向かっていく。ご丁寧に、黒い覆面をかぶっていて、顔はわからない。

「ハクっ！」

ぼくは叫び、駆け寄った。

バットを振り上げる少年の懷に、ぼくは飛び込むように入っていつて、握った拳を振り上げる。

空気が裂ける。相手の手を思いつき殴り上げると、すっぱ抜けたバットが宙を舞う。ぼくは、バットの行方を確認することはせずに、すぐにその場で一八〇度体を回転し、今まさに、ハクの頭上に落下しようとしている角材を右手でつかんだ。

相手の少年は驚いたように体を痙攣させる。

ぼくは止まらない。

角材を握ったまま低い体勢を取り、足を回して、少年を転倒させる。相手の手の力が緩んだ一瞬に、角材を引いて、その反動を利用して角材を体を軸にそのまま回転。

円運動。

回転する角材の先は、バットを手に持った少年の後頭部に衝突す

る。

それほどダメージにならないことはわかっている。どちらとも。けれども、怯ませることはできた。

その隙にハクを立たせて背後に庇いながら公園の中まで後退する。奪った角材を木刀のように構える。

木刀代わりには、少し長すぎるけれども。

さらに続く、バイクの音。

一台、二台……………。

五人だ。

ぼくは、息を吐いて、そこで初めて、これが何なのか、何が起きているのかを、考えた。

ハクを――ハクを狙っている？

ああ、またか、と思う。

懐かしい、とも。

以前はよく、ハクは狙われていた。一年前は。

ぼくとハクが出会ったころ。

フジヤの《クレスト》による素土の街の支配が、ほぼ最終段階に来ていたころのことだ。

フジヤは《クレスト》を結成して街を支配するのに、かなり荒っぽい手段をも使用していたのだという。

詳しくは知らないし、係わる気もない、けれども。

フジヤとかつて同じチームで、今も交流がある。それだけでハクが、素土の街の、少しずれた向上心に溢れる異端なる少年少女たちに、様々な意味で狙われるのは当然だった。

その意味で、この状況は懐かしい。

誰かが集団でハクを襲いに来て、それをぼくが防ぐ。

この状況は当時とよく似ている。

フジヤに赤と青、二人の護衛、そして《クレスト》のメンバーたちがあるのと同じように、ハクにはぼくがいる。なんて。少し自惚れてみたりする。

フジヤが、《クレスト》が、ぼくを、ハクと同様に扱ったことを、考える。

シユンには見向きもしなかった、ほとんど無視していた彼らが、ぼくに一目を置いた理由を、考えてみる。

一年前の結果。

いや、それに意義を見出すのならば、成果と言うべきか。

組織を捨てたハクが、『戦力』と呼ばれるものをほとんど持たずに、この街で一定の地位を保ち続けていた理由を。

例えばフジヤの傍に常に付き従い、片時も離れない護衛、赤と青。例えば占い師《楽土》の、過剰なまでの防衛システム。

この街で力なくして目立ち続けることは、実のところ恐ろしく難しい。

光花市随一の、高犯罪発生率地域、素土。

その土地のほとんどが埋め立てと造成による新興のものであるため、七家の支配が及ばなかった、予め見捨てられた土地。

その知恵は多くの人間から一目を置かれていたものの、ハクにはほとんど戦力がなかった。ハクが存在が過剰なまでに注目を集めるようになったのは、フジヤの活動の発展と連動している。しかしハクは、頑なまでに《クレスト》に参加しようとはしなかった。

理由はわからない。ぼくだって、いまだに知らない。けれども、そのままではいつどこで誰に襲われるかもしれない。

危惧は高まり、いよいよ現出しようとした、そのころ——ぼくと、ハクは出会ったのだ。

それは偶然だったのか、必然だったのか、よくわからない。

ぼくが《紅十字》と——ハクの《斑の賢者》と等価のように語られる、その原因。

一年に渡って、ハクに襲ってくるどんな集団であろうとも、ほとんど一人で、完璧に退けたという、実績。

七家の一つ、杜代家の、力。

そして、杜代家から出て、一人暮らしをするようになる、原因を

作った力。

目の前の少年たちは、一年前からの流れと根を同じくするものなのだろうか？

ハクを、ただフジヤの友達だという理由で襲おうとする者たちなのだろうか？

ぼくの背後でハクがつぶやいた。

「しまったな……思ったより行動が早い。チコたちを遠ざける前に来てしまった」

……何？

ちよつと待て、ハク様。今の言葉は聞き捨てならないぞ？

ぼくはゆっくり振り向いた。

「今、なんか変な言葉を聞いたような気がしたのですが？　ハク様」

「ん？　何がだ？　すべて予定通りだ。気にするな」

いやあんだ。今、予測が外れたみたいなこと、言いませんでしたか？

「『しまったな』とはどういうことですか？」

「予測が外れた、ということだ」

「何を予測してたんでしょうか？」

「こいつらが『もう少し後に』襲ってくることをだ」

「予定通りってのは？」

「こいつらが襲ってくるという、予定だ」

あー、つまり――

「全部あんたの差し金かつ！」

頭の配線がすべて一本につながるような衝撃。

まさしく電気が走ったような閃き。

「うわっ。なんかわかってきたぞ。うげっ、なんて無茶なことするんだ、この男はっ！」

「大丈夫だ、キョウ。君ならこんなザコの五人や六人、簡単に倒せる。信じてるぞ」

「こ、このやろう。自分に戦闘力がないからって無責任に好き勝手

なこと言ってるよ」

「適材適所だ。おれは脳。お前は手足。ほら、手足。脳の命令に従え」

開き直りやがった。つーか、本性？

少し腹が立つ。けれども、逆らう気には、なぜかなれない。

ぼくはため息をついて、改めて角材を両手で握り、構えた。

角材は木刀代わりには少し持ちにくく、長すぎて、バランスも悪かった。

剣術を習っているのは強くなるためじゃない。ぼくにとってそれは、身の内から溢れる杜代家の力を制御する、一手段としてのもの。さて、見せようか？

素土の街最強と呼ばれたこともある、その力を。

「お、お前ら、何を話してるんだっ！」

覆面の男の一人が、耐え切れなくなったように言葉を吐き出した。ハクの含み笑い。

「くくっ」

「な、何がおかしいっ！」

「いや、なあに。声を出さなければまだしも誤魔化しが聞いただろうが、声を出してしまっではお仕舞いだな。とことん滑稽すぎて、哀れだな。お前たち」

「なんだとっ！」

「まあ、どっちにしろ、全員捕縛するけどな」

いや、捕縛するって、するのはぼくだし……ハク様。その笑い、なんだかひどく邪悪っていうか、悪役っぽいです。

「て、てめえらっ、何を話してやがるっ！」

覆面の男は叫んだ。ぼくには彼らが何者か、わからない。けれども、わかっていることは一つ——いや、二つ。

ぼくは振り向いて、ため息をついた。

改めて角材を持ち直し、軽く振ってみるとやっぱりバランスが悪い。

「ああーっ、もう、持ちにくいなあ。なんだってんだ、このやろっ」
不機嫌な気分で角材を土の地面に思い切り叩きつける。

みしっ、と音がして、角材は二つに折れ曲がった。

折れ曲がっただけだ。完全に折れて二つになっただけではない。
ぼくは毒づく。

「ちくしょう。折れるならきっちり完全に折れてくれよなっ。ああーもう、中途半端」

折れた先を右足で踏み抜いて、強引に二つにねじ切る。

「キョウ。思い通りにならないからといって、八当たりはやめた方がいい」

その言葉は正しいかもしれないけれども、ハクだけには言われたくないと思う。

「何なんだ！ てめえらっ！」

覆面は叫ぶ。

本当に、何なんだろうね？

ぼくにもよくわからないや。

やや短くしすぎたような感じもするが、長すぎるよりはずっと使いやすいくなった角材を構え、ぼくは笑った。

「まだわからない？ そうだね、ぼくにもわからないかも……けれども、これだけは言える」

初めて、まともにかけた声に、覆面たちはやや戸惑ったように小さくざわめき合う。

「君たちはぼくに勝てないことと、君たちはハクの策略に乗せられて、出てきてしまった、ってことだ」

言い捨てて、ぼくは走る。

一気に間合いを詰めて、驚愕の声の漏れる覆面集団の真ん中で、角材を一振りした。

咄嗟に仰け反る覆面連中に一瞥を向けて、ぼくは、戦闘の始めには必ずすると決めている行為を、決行した。

すなわち、大地に、垂直に、叩きつけるように、角材を突く。

ダンッ

軽やかとも言える衝撃音を大地から空気中に拡散させて、棒高跳びの要領でばくの体は宙に浮く。――ただし、棒は手放さず。

その高さ、軽く3メートル。

突然の人間離れた跳躍力に、戸惑わないものはほとんどいない。彼らの頭上を飛び越え、背後に降り立つ。目の前の背中に肘を思い切り叩きつける。それでまず一人。角材を振るい、振り向きかけた一人を、構えた金属バットの上から殴り飛ばす。それで二人目。二人目を殴り飛ばしながら体を沈め、隣に突っ立っている覆面に軽く足払いをかけたところを急激に体を起こして突き倒す。三人目。角材を少し離れた位置に立っている覆面に放り投げ、よけるためバランスを崩したところを一気に間合いを詰め、タックル。四人目。最後に一人残った、最初に叫んだ覆面を、余裕を持って殴り飛ばし五人目。

五人の覆面たちは、一様に地面に倒れたり、しりもちをついたりしている。

それを確認してぼくは、ふうつと息を吐いた。

ほとんどそれは、一瞬の出来事。

彼らにダメージはほとんどないだろう。ぼくは攻撃に力を入れてはいないし、相手の力もそれほど大きくはなかったので、反動は少ないはず。ただ、認識できる最小単位に極めて近い瞬間で倒され、彼らは呆気にとられている。

ぼくは笑った。

構えは解かず、警戒は緩めなかったが。

ばくの隣にハクが歩を進めてきた。

「はははっ。だから言っただろう。お前たちは勝てない」と

……いや、ハク様。何であなたが勝ち誇るのですか？

戦ったのはぼくだ。

それも、相手にダメージはなく、これ以降も戦闘が続行されると仮定すれば、第一段階に過ぎない今の状況で勝ち誇るのは間違っ

いる。

間違っているといえばああ、そうだ。チコが大人しい。シュンが大人しいのはいつものことだけれども。

これほどハクが偉そうに喋っているのだ。いつもだったらチコの賛辞や意味不明の爆笑が入るところだ。

どうしたのだろう？ とちらりと背後に視線を向けて、ぼくは首を傾げた。

ぼくとハクの背後にいるのはシュンだけで、チコの姿はない。どこへ消えたのかと視線を巡らせた瞬間だった。

「きやあぁっ」

公園の別の出口付近。チコが覆面の男三名に追いかけられていた。考えるより早く、ぼくは駆け出していた。駆け出しながら考え始める。

どうしてこんな状況に？ チコは別出口から逃げようとしたのか？ ハクがいるのに？ いや、そうではなくて。邪魔にならないように離れようとしたところを見付かって追いかけられているのだろう。お世辞にもチコの足は速いとはいえない。追いつかれるのは時間の問題に思えた。

「助けてーハクう！」

チコの悲鳴でぼくは力が抜けそうになった。

いや、チコがハクに助けを求めるのは当然過ぎる行為だけれども。助けに行くのはどうせぼくなんだから、少しは気にしてほしかった。

——けれども、わずかに力が抜けそうになったせいで、ほんの少し追いつくのが遅れることとなり。

さらに間の悪いことに、自分自身の叫び声に引きずられるように、チコは前のめりになり、こけた。

「きやうんっ」

かわいらしい悲鳴だけれども、ぼくは自分の全身から血の気が引いていくのを感じた。

「チコっ！」

さすがに声を張り上げるハク。その余裕のなさが、より危機性を強調しているように感じられ、焦燥の影が、ぼくの心にも忍び寄ってくる。

一気に距離を詰めてくる覆面男。

間に合うか――？

「いたたたたつ」と、頭を抑えながらチコが起き上がり、目の前に迫った男たちに気づき、表情が青褪めた瞬間だった。

どこからか、石が放物線を描いて降ってきた。

ひょんつ、どすん、と。

直径30？を超える巨大な石が、まるで小石でも放り投げたような気軽さで宙を飛び、覆面男たちの脇に落ち、激しい地響きを立てる。

覆面たちの足が止まる。ぼくは一気に近づき、三人を、今度はやや力を込めて、叩きのめした。

――過程を言葉にするまでもない。

突いた。

殴った。

掃った。

倒れた。

ぼくは呼吸をゆっくりと整える。

「ユウナ……！」

チコの声に、ぼくも驚いて顔を上げた。石が飛んできた方角。公園の表口で、ユウナが肩で息をしていた。その周囲にはユウナ以外は誰もいない。

うわ。まさか、あの石、ユウナが投げたのか？ 軽く三〇？くらいはあるだろう？ あるんじゃないのか？ それをああも綺麗な放物線を描くように投げられるか？ うわあ。前から馬鹿力だと思っていたけれども、そこまで人間離れしているとは思わなかった。腕も細いし、体にもほとんど筋肉がついているようには見えないっていうのに。どうしてそんなことができるんだ？ 人間か？

——なんて、ちょっと自分のことを棚に上げて思ってみたりする。
「ユウナ？ 帰ったんじゃないかったのか？」

ハクが近づいていって、尋ねていた。別段、その様子に不自然さ
は感じられない。ユウナの馬鹿力を気にしている様子さえ、まったく
見られなかった。

「えっと……怪しげな覆面スクーターとすれ違ったから、気になっ
て戻ってきたの……でも、これ、どういうことよ？」

いって、ユウナは駆け寄ってきた。ぼくが殴り倒した覆面の一人
の腹を踏み付けて、チコを助け起こす。

ぼくは周囲を見回した。

折れた角材。転がった金属バット。グラウンドの真ん中の不自然な
石。昏倒する覆面男三人。呆然と座り込む、覆面五人。

「あー……これは……」

ぼくがさて、何からどう説明しようかと、考えていたその時だっ
た。

さらに事態は変化した。

「どういうことだ？ これは？」

公園に入ってきた二人組は、服装は共にスーツで、性別が異なっ
ていた。

見覚えのある顔に、ぼくは首をかしげた。

はて、誰だったわけ？

ぼくはわからなかったが、向こうはぼくたちに気づいたようだっ
た。

「ええと、少し説明してくれないかね？」

ぼくだけに尋ねた言葉ではなかったのだろうが、ぼくはどう説明
しようか、説明すべきなのか、ハク並みの偉そうな口調だなど、し
ばし考え込んでしまった。しかし、そんな時間も、ハクのあっさり
とした挨拶で、崩れることとなる。

「やあ、久しぶりです。刑事さんたち」

ああ、思い出した。

以前、ぼくのアパートまでわざわざ事情聴取に来た刑事さんたちだ。確か名前は男の方が「お兄さん」で、女の方が「アニメ声」の人だ。

……そんなわけ、あるか。

自分で自分に力ない、弱々しいツツコミを入れる。

むなしい。

ま、名前なんて、どうでもいいか。

しかし、思い出したんだけど、アニメ声のお姉さん。相変わらずクールでカッコイイんだけど、今回の服装はまともだ。前はマタニティ・ドレスだったし。あれはやはり何かのギャグか、罰ゲームだったのだろうか？ それとも、ほんの一日（よく考えたらつい昨日の話なのだ）で出産をこなし、職場復帰したとでも言うのだろうか？

「説明は、おれがしよう」

ハクは相変わらず偉そうに言った。

いよいよ事件の解答編に入るのだろうか？

ぼくはぼんやりと、他人事のように考えた。

本当に他人事だけだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1926y/>

異端 - 吸血鬼事件 -

2011年11月10日11時09分発行